

『関西・考古学の日 2017』記念講演会

『近世城郭と城下町の風景』資料集

日時：平成 29 年 9 月 30 日（土）13：00～17：00 会場：イオンモール和歌山 3階イオンホール

記念講演 「近世城郭を考古学する—発掘調査でわかったこと—」

滋賀県立大学 教授 中井 均 氏

基調報告 各地域の近世城郭の調査事例

「大坂城下町とその周辺」	(公財) 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所	小田木富慈美
「伏見城」	(公財) 京都市埋蔵文化財研究所	山本 雅和
「和歌山城」	(公財) 和歌山市文化スポーツ振興財団	北野 隆亮
「利神城跡と平福御殿屋敷跡」	(公財) 兵庫県まちづくり技術センター	垣内 拓郎

主 催：『関西・考古学の日 2017』実行委員会
事務局：公益財団法人和歌山県文化財センター

『関西・考古学の日2017』記念講演会
『近世城郭と城下町の風景』開催趣旨

群雄が割拠し、戦乱が相次いだ戦国時代には、大小様々な城郭が列島各地に築かれました。これらは、織田信長・豊臣秀吉による天下統一への過程で淘汰されていくとともに、城郭をつくる行為そのものが大きく規制されていきます。その一方で、城郭を防御する仕組みは石垣の普及と相まって急速に発達し、礎石を伴う瓦葺きの建物が建設され、軍事と政治が高度に融合した荘厳な近世城郭が生まれてきました。この城郭の築造技術は、徳川の政権下で技術的・制度的にさらに洗練されていきます。

こうして成立・展開していく近世城郭は、領国の政治的・経済的中心となるべく城下町を伴います。城下町は、城郭を核として武士・町人・寺社などの区域が分けられて、近世の身分制度を空間的に表現するとともに、城下町の多くは水陸交通の結節点となり、様々なヒトやモノが行き交うため経済的・文化的な交流が活発になされました。そのため各城下町の実情は多様な在り方を示しますが、近世城郭と城下町の成立と展開によって社会の構造が大きく変わったことは共通します。

近畿地方は、織豊政権の主導で先進的な城郭・城下町の整備が進み、近世城郭の規範を生み出した地域といえます。江戸時代には政治の中核は東国に移りましたが、経済的・文化的にはなお高い求心力を保ち、近世城郭の在り方に影響を与え続けました。近畿地方の近世城郭・城下町を調査・研究することにより、近世城郭・城下町の歴史的意義を考える上で重要な手がかりを与えてくれると考えられます。

そこで、本年度は『近世城郭と城下町の風景』というテーマで、近畿地方における近世城郭・城下町の特徴や歴史的意義について考古学の立場から考えてみたいと思います。記念講演では、近世城郭を発掘調査することにより何が明らかになるのか、について講演いただきます。基調報告では、大阪・京都・和歌山・兵庫の近世城郭・城下町の最新の調査事例を報告していただきます。

本講演会を通じて、近畿地方の近世城郭・城下町をめぐる最新の研究成果や考古学的な手法の有効性とその可能性を多くの方々に知っていただける機会になれば幸いです。

『関西・考古学の日2017』実行委員会

『関西・考古学の日2017』
記念講演会『近世城郭と城下町の風景』日程

日 時	平成29年9月30日(土)		
会 場	イオンモール和歌山 3階イオンホール 和歌山市中宇楠谷573		
12:00～	受付		
13:00～13:10	開会宣言	主催者挨拶、開催趣旨説明 (実行委員会事務局)	
13:10～14:20	記念講演	「近世城郭を考古学する—発掘調査でわかったこと—」	
		滋賀県立大学 教授	中井 均 氏
14:20～14:55	基調報告1	「大坂城下町とその周辺」	
		(公財)大阪市博物館協会 大阪文化財研究所	小田木富慈美
14:55～15:10	休憩		
15:10～15:45	基調報告2	「伏見城」	
		(公財)京都市埋蔵文化財研究所	山本雅和
15:45～16:20	基調報告3	「和歌山城」	
		(公財)和歌山市文化スポーツ振興財団	北野隆亮
16:20～16:55	基調報告4	「利神城跡と平福御殿屋敷跡」	
		(公財)兵庫県まちづくり技術センター	垣内拓郎
16:55～	閉会宣言		

近世城郭を考古学する —発掘調査でわかったこと—

滋賀県立大学 中井 均

はじめに

- 2016/04/14、16 に起こった熊本地震(マグニチュード7.3) ⇒ 崩れ落ちた石垣【加藤清正が築いた石垣が崩れた驚き】
50ヶ所、229面におよんだ石垣の崩落
その後の調査 ⇒ 崩れたのは清正の築いた石垣ではなく、新しい石垣という結論【?】
新しい石垣とは清正の築いた石垣が崩れたために新たに築かれた石垣である
- 石垣は決して築城当初のものが残されているわけではない ⇒ 江戸300年間の石垣は崩落と修築の繰り返しである

近世城郭とは

- 近世城郭とは ⇒ 中世城郭→近世城郭か、中世城郭→織豊城郭→近世城郭か
織豊(系)城郭の特質 ⇒ 石垣(高石垣)・瓦(金箔瓦)・礎石建物(天守)という3つの要素【考古学的な分析が可能な要素】
- この3つの要素は中世城郭とは大きな画期となる ⇒ 近世城郭として認識してよい
※中世城郭のなかにも例外的に石垣や瓦、礎石建物を持つものはあるが、3つの要素を伴うものは存在しない(石垣のみ、瓦のみ、礎石のみ、石垣+礎石、礎石+瓦は存在)
- ただし、本講演では基本的には慶長5年(1600)以降の城郭を中心に分析をおこないたい ⇒ 政策としての城郭【徳川政権による「一国一城令」、「武家諸法度」】
- 基本的にはこうした政策によって普請(土木)は変えることができない ⇒ 縄張りという平面形態は300年間変わらない
※作事(建築)については元和武家諸法度では申請が必要であったが、寛永武家諸法では先規(旧来通り)であれば申請の必要がなくなる【規制緩和】
武家諸法度 ⇒ 「諸国ノ居城修補ヲ為スト雖モ、必ズ言上スベシ。況ヤ新儀ノ溝塹堅ク停止令ムル事」(元和令)
「新規ノ城郭構営ハ堅クコレヲ禁止ス。居城ノ隍壘・石壁以下敗壞ノ時ハ、奉行所ニ達シ、其ノ旨ヲ受クベキナリ。櫓・塀・門等ノ分ハ、先規ノゴトク修補スベキ事。」(寛永令)

慶長の築城ラッシュ

- 慶長5年(1600)の関ヶ原合戦 ⇒ 諸大名の転封【新たな領地における居城の新規築城】
関ヶ原合戦は平和をもたらしたのではなく、実はこうした転封は各地で軍事的緊張を生む ⇒ 防長の毛利氏対安芸の福島氏、筑前の黒田氏対豊前の小笠原氏、あるいは土佐の山内氏対長宗我部氏の旧臣など【本支城体制の貫徹】
- 筑前では ⇒ 本城【名島城から福岡城へ】、支城【若松城・黒崎城・益富(大隅)城、鷹取山城・麻底良城・松尾(小石原)城【筑前六端城】】

豊前では ⇒ 本城【中津城から小倉城へ】、支城【門司城・香春城・岩石城・一戸城・龍王城・高田城・木付(杵築)城】

いずれも石垣、瓦を伴う本支城体制

- 出雲では ⇒ 関ヶ原合戦の戦功により堀尾吉晴・忠氏父子が入封【富田城から松江城へ】
支城 ⇒ 三刀屋城・赤名瀬戸山城・亀嵩城(三沢城 or 亀嵩城)
元和一国一城令 ⇒ 支城の廃城(城割り)【寛永の国絵図ではこの3城に「古城」と記されている】

発掘調査で何がわかったか -遺構としての石垣-

- 石垣のなかから石垣が見つかる! ⇒ 埋め殺し石垣、埋没石垣と呼ばれる
安土城、肥前名護屋城 ⇒ 短時間での改修【計画変更の可能性】
丸亀城、仙台城 ⇒ 石垣の修理工事で発見される【修理の痕跡】
- 仙台城 ⇒ 本丸石垣の解体修理で内部から石垣が検出される【慶長5年の伊達政宗築城段階のⅠ期石垣】
元和2年(1616)の地震によってⅠ期石垣が崩壊 ⇒ 築き直すのではなく、埋めてしまってその前面に新たなⅡ期石垣を築く
さらに寛文8年(1668)の地震によってⅡ期の石垣が崩落し、その前面に現在のⅢ期の石垣が築かれる
- 伊予松山城 ⇒ 本壇(天守曲輪)周辺での発掘調査【現存石垣とは違う位置で石垣が発見される】
甲賀市水口図書館所蔵「与州松山本丸図」⇒ 現在の本壇とは違う構造が描かれており、従来は絵図が誤っていたと理解されていた【発掘調査の結果、実は絵図が正しく描かれていたことが判明】
小鍛冶遺構などを埋めて整地 ⇒ 石工の道具を現地で修理していたことも判明
- 現存する近世城郭の石垣 ⇒ 決して築城当初の石垣が残っているわけではない【石垣の型式差、石垣の石材差】
- 石垣修理のシステム ⇒ 地震、大雨等の自然災害による石垣の崩落【幕府へ崩落の報告 ⇒ 崩れた箇所を絵図を添えて老中へ報告 ⇒ 老中からの許可(老中奉書) ⇒ 修築着手】
- 数多く残る城郭絵図 ⇒ 大半が修築願に伴う絵図(下図、控図、本図)
同一の城ではほぼ同じ絵図に崩れた箇所のみが加えられる【原本(元図)が存在し、修理ごとにそれを写して提出絵図を作成】
※鳥取城、米子城ではほぼ江戸時代を通じて同じ構図(残されている絵図は提出図ではなく、控図もしくは下図)
- 彦根城に見られる石垣型式 ⇒ すべてが慶長9年(1604)に築かれた石垣ではない【彦根藩井伊家文書には石垣修築に関わる16通もの老中奉書が残されている(江戸時代を通じて少なくとも地震、大雨などにより彦根城の石垣は16回崩れている)】
- 金沢に残る石垣 ⇒ 野面積み、打込接、切込接【時代による技法の変化】
※岡山城(宇喜多氏→小早川氏→池田氏)、広島城(毛利氏→福島氏→浅野氏)

和歌山城に残る石垣 ⇒ 緑泥片岩、砂岩、花崗岩【時代による石材と技法の変化】

発掘調査で何がわかったか -遺物としての瓦-

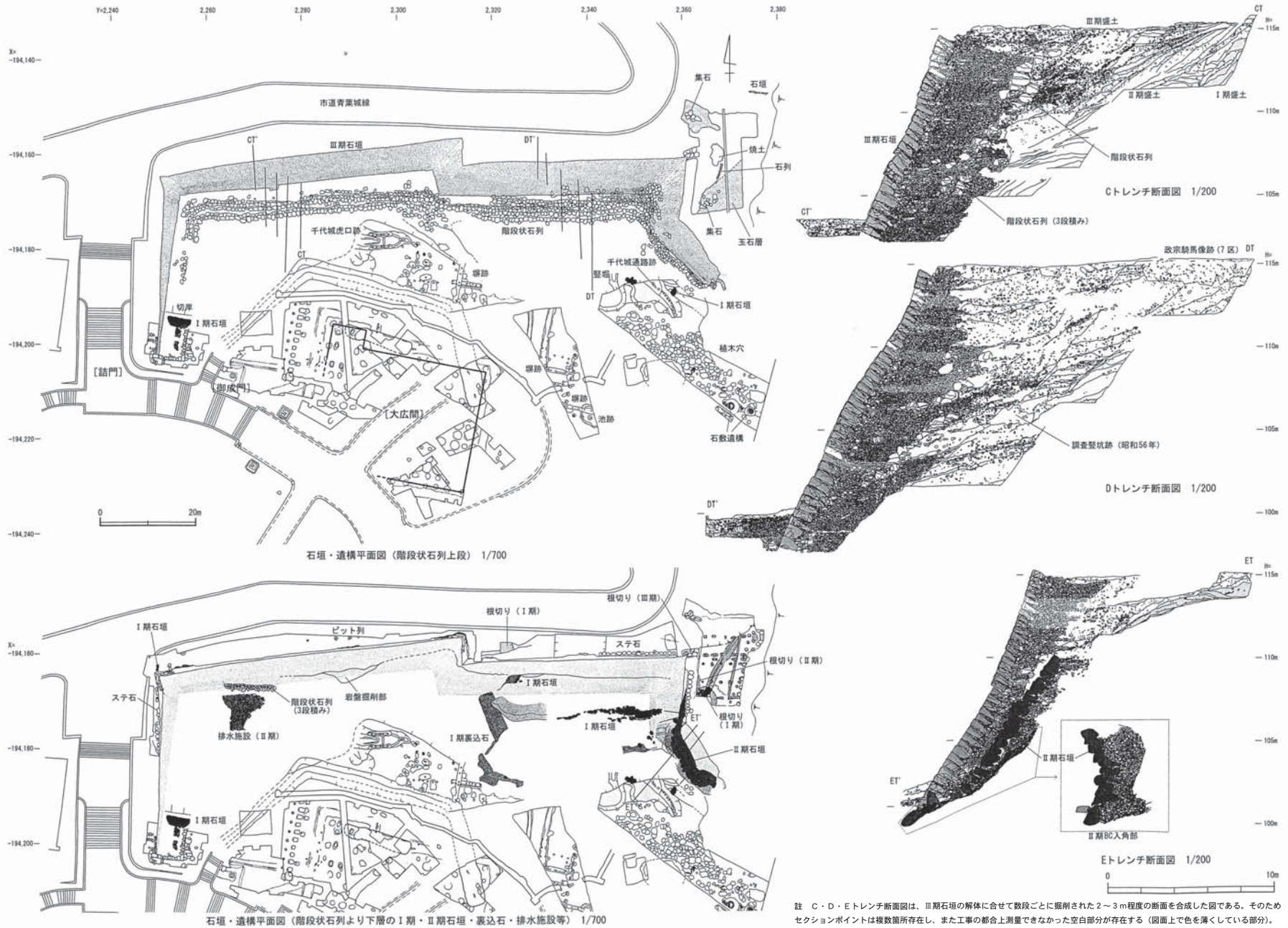
- ・遺物の大半は瓦 ⇒ 一度の調査で数トンの瓦【かつては瓦礫の山】
- ・家紋瓦の出現 ⇒ 安土城出土の軒平瓦(中心飾が桐紋)【最古の家紋瓦】
※但し、安土城(天正4年:1576)では軒丸瓦に家紋瓦は現在のところ出土していない
- ・大坂城(天正11年:1583、慶長3年:1598)、聚楽第(天正14年:1586)、伏見城(指月城→文禄元年:1592、木幡城→文禄5年:1596)では軒丸瓦、軒平瓦に家紋瓦(金箔)が登場 ⇒ 但し、城郭部分よりも城下町の大名屋敷に多く使用される【城郭部分は桐紋という象徴的な家紋瓦】
沢瀉紋(豊臣秀次)、橘紋(前田玄以)、木瓜紋(織田信雄)、扇に月丸紋(佐竹義宣)、山字紋(最上義光) ⇒ 家紋に金箔を施して威光を示す【城下の大名屋敷を特定する資料としても重要】
- ・日本列島全域に広がった家紋瓦 ⇒ 古くは外様大名の城郭に多く認められると思われていたが、近年の発掘調査によって譜代大名も家紋瓦を使用していたことが判明
姫路城 ⇒ 池田氏(揚羽蝶紋)、本多氏(立葵紋)、松平(奥平)氏(沢瀉紋)、榊原氏(源氏車紋)、酒井氏(劍酢漿紋)
和歌山城 ⇒ 桑山氏(桔梗紋)、浅野氏(違い鷹の羽紋)、徳川氏(三つ葉葵紋)
和歌山城下 ⇒ 家老安藤氏屋敷(下り藤紋)、家老水野氏屋敷(沢瀉紋)
- ・金箔瓦が出土する城郭
織田信長時代 ⇒ 安土城、岐阜城、伊勢神戸城、松ヶ島城【信長と子息の城のみ】
豊臣秀吉時代 ⇒ 大坂城、聚楽第、肥前名護屋城、伏見城、近江八幡山城、清洲城、大垣城、岡山城、広島城、松本城、小諸城、上田城、会津若松城、山形城、小倉城など【自らの居城と一族の城(一門の城)、徳川家康領国に接する城郭(徳川家康包圍網の城)、京～肥前名護屋城間の城郭(黄金ロードの城)】
関ヶ原合戦以降 ⇒ 江戸城、仙台城、相馬中村城など
※江戸城下の大名屋敷にも多く葺かれる(有楽町一丁目遺跡藤井松平家屋敷など)
こうした出土状況 ⇒ 金箔瓦の使用については規制の存在していた可能性が考えられる
- ・滴水瓦の葺かれた城郭 ⇒ 滴水瓦とは軒平瓦の軒先部が倒三角形を呈しており、軒丸瓦、軒平瓦ともに瓦当の接合部が110～130度の仰角となる【中国、朝鮮半島で広く用いられる瓦】
古くは高麗瓦、朝鮮瓦と呼ばれる ⇒ 雨水が滴り落ちる構造から近年滴水瓦と呼ばれるようになる【現在では李朝瓦、李朝系瓦とも呼ばれる】
日本列島から出土する滴水瓦 ⇒ その出土遺跡の大半が近世城郭
- ・滴水瓦出土城郭とその築城者 ⇒ 熊本城(加藤清正)、麦島城(小西行長)、伊予松山城(加藤嘉明)、甲府城、和歌山城(浅野長政、幸長)、徳島城(蜂須賀家政)、洲本城(脇坂安治)、鹿野城(亀井茲矩)、高松城(生駒親正)、金石城(宗義智)、富田城(吉川広家)、姫路城(池田輝政)など
築城者のうち、池田輝政を除く全員が豊臣秀吉の朝鮮出兵(文禄・慶長役)に参戦渡海 ⇒ 参戦した武将のステイタスとして朝鮮の瓦を自らの居城に葺いた

日本で製作された瓦(熊本城、伊予松山城、甲府城、和歌山城、徳島城など)と、朝鮮で製作された瓦(麦島城、金石城、富田城)

- 日本で製作された軒平瓦の中心飾 ⇒ 熊本タイプ【界線を引き年号を記す(朝鮮の模倣)】と、姫路タイプ【家紋を中心に配置】
慶長の滴水瓦から江戸の滴水瓦へ ⇒ 熊本城の滴水瓦は慶長年間のもは瓦当との接合が110～130度であったものが、幕末の補修瓦では90度になってしまう【滴水瓦本来の機能が忘れ去られてしまう】
- ・寒冷地の瓦対策 ⇒ 燻瓦は寒冷地では冬場に凍てついて爆ぜて割れてしまう
金沢城の屋根瓦 ⇒ 現存建物(石川門、三十間長屋)は木型に鉛板を貼り付ける【鉛瓦】
しかし白鳥堀の発掘調査では最下層(前田利家築城段階)から燻瓦が出土 ⇒ 割れることを覚悟のうえで瓦を葺いた【織豊系城郭として、それでも瓦を欲していた】
丸岡城天守 ⇒ 笏谷石製瓦【築城当初は柿葺き】(福井城も笏谷石製瓦)
会津若松城 ⇒ 施釉瓦【築城当初は燻瓦】(盛岡城、津和野城も施釉瓦)
弘前城 ⇒ 銅板葺、橡葺【燻瓦も出土する】
- ・家紋瓦は前城主のシンボル ⇒ 姫路城に見られる数多くの家紋瓦【新たに封ぜられた城主は前城主の家紋瓦をそのまま用いる】
修築に際して自らの家紋瓦を葺くにすぎない
※江戸時代に城主が代わるのは基本的には譜代大名の城 ⇒ 外様大名、親藩は代わらない
【外様は賜りものとしての居城、譜代は預かりものとしての居城という意識が強い】

おわりに

- ・石垣の型式 ⇒ 修築の履歴【刻まれた地震などの災害史】
- ・山形城の発掘調査 ⇒ 土塁上で土堀の基礎部分が検出される【三角形に突出する部分の存在】
屏風折の痕跡 ⇒ これまで絵図では描かれていない【地表面では認識できない】
櫓台を埋める土中に前城主(堀田氏)の家紋を意識的に打ち欠いた軒丸瓦を投棄
- ・近世城郭も中世城郭と同じく廃城時の姿を示しているに過ぎない ⇒ 江戸300年の姿は発掘調査によって明らかにされる
現存する遺構は様々な年代の構造の合体 ⇒ 考古学的な分析によって年代を考える【様々な時代の工法や材質(石材)などを知ることができる】
- ・今、お城が大ブーム ⇒ 天守閣=お城はもう古い【本物の残された遺構(石垣、土塁、街中に残る惣構の堀など)が知りたい見学者】
金沢城の石垣、富山城の石垣、和歌山城の石垣、岡山城の石垣など
- ・復元は必要か? ⇒ コンクリートではなく、木造であってもそれは単なる1/1の模型に過ぎない【木造は本物という誤認】
- ・近世城郭は地域のシンボル ⇒ いかにも本物を提供できるかが重要【自治体に求められる賢い選択】



註 C・D・Eトレンチ断面図は、III期石垣の解体に合わせて数段ごとに掘削された2~3m程度の断面を合成した図である。そのためセクションポイントは複数箇所存在し、また工事の都合上測量できなかった空白部分が存在する(図面上で色を薄くしている部分)。

図1 仙台城本丸石垣遺構平面・断面図(仙台市教育委員会 2004 『仙台城本丸跡1次調査』)

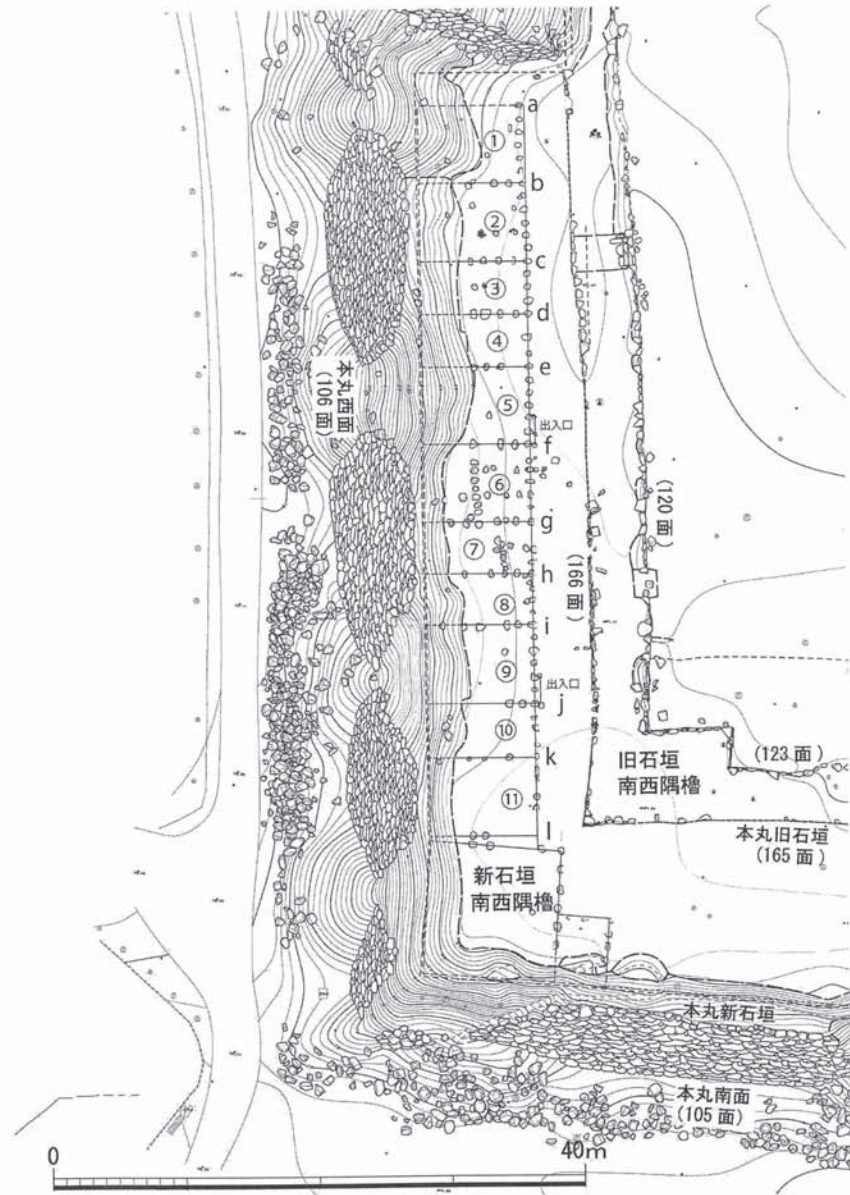


図2 肥前名護屋城本丸多門櫓遺構配置図
(宮崎博司・市川浩文 2016 「肥前名護屋城跡の天守・多聞櫓」)

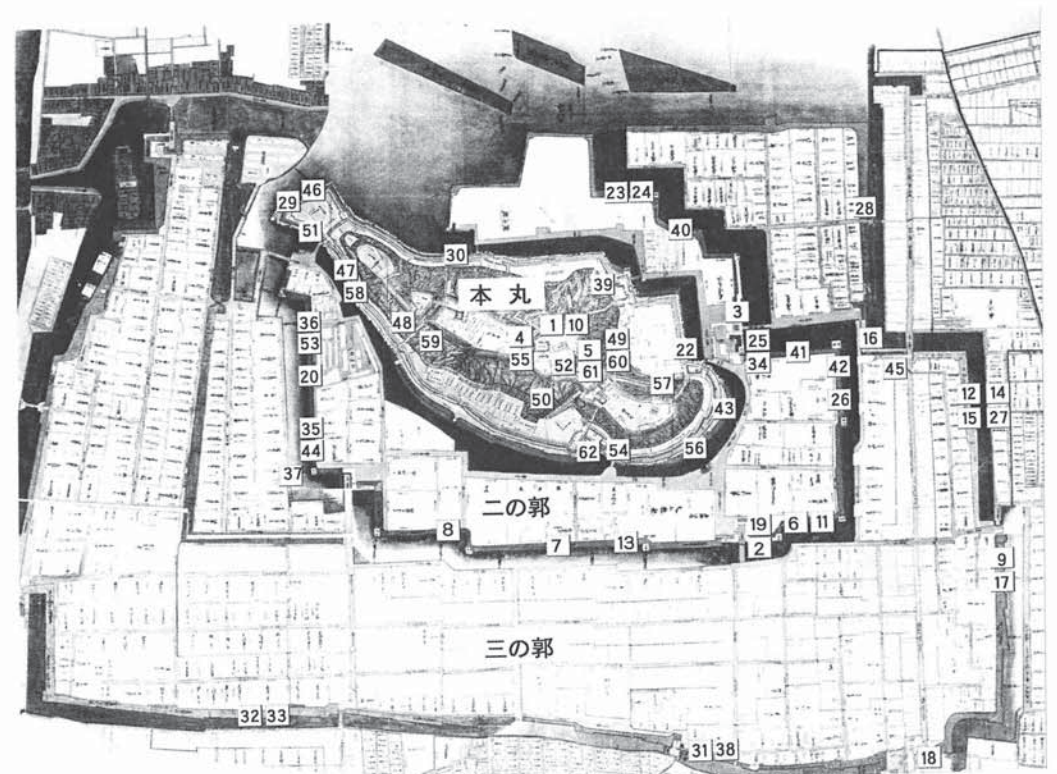


図3 文献史料で把握できる彦根城石垣修復位置
(彦根市教育委員会 2017 『佐和山御普請、彦根御城廻御修復』)

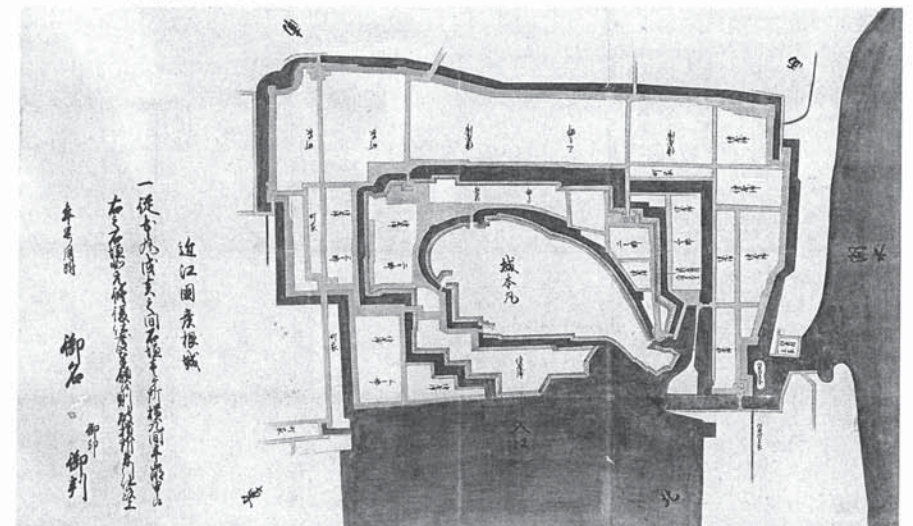


図4 近江国彦根城図(天保6年：1835)
(彦根城博物館 2013 『天下譜請の城 彦根城』)

- | | | | | | | | |
|---------|----------|----------|---------|----------|----------|----------|-----------|
| 1. 仙台城 | 11. 松本城 | 21. 八幡城 | 31. 明石城 | 41. 金川城 | 51. 岩石城 | 61. 佐土原城 | 69. 高知城 |
| 2. 若松城 | 12. 岐阜城 | 22. 大津城 | 32. 高砂城 | 42. 岡山城 | 52. 安岐城 | 62. 都城 | 70. 佐和山城 |
| 3. 福島城 | 13. 犬山城 | 23. 伏見城 | 33. 姫路城 | 43. 郡山城 | 53. 鷹取城 | 63. 駿府城 | 71. 大村城 |
| 4. 沼田城 | 14. 名古屋城 | 24. 聚楽第 | 34. 竹田城 | 44. 広島城 | 54. 福岡城 | 64. 久野城 | 72. 山形城 |
| 5. 唐沢山城 | 15. 清須城 | 25. 亀岡城 | 35. 鬼ヶ城 | 45. 高松城 | 55. 唐津城 | 65. 江美城 | 73. 相馬中村城 |
| 6. 土浦城 | 16. 神戸城 | 26. 大坂城 | 36. 鳥取城 | 46. 徳島城 | 56. 名護屋城 | 66. 日野江城 | |
| 7. 江戸城 | 17. 松ヶ島城 | 27. 郡山城 | 37. 鹿野城 | 47. 松山城 | 57. 金石城 | 67. 鷹ノ原城 | |
| 8. 甲府城 | 18. 松坂城 | 28. 和歌山城 | 38. 米子城 | 48. 河後森城 | 58. 熊本城 | 68. 麦島城 | |
| 9. 上田城 | 19. 彦根城 | 29. 岩屋城 | 39. 富田城 | 49. 小倉城 | 59. 宇土城 | | |
| 10. 小諸城 | 20. 安土城 | 30. 由良城 | 40. 松江城 | 50. 松山城 | 60. 佐敷城 | | |

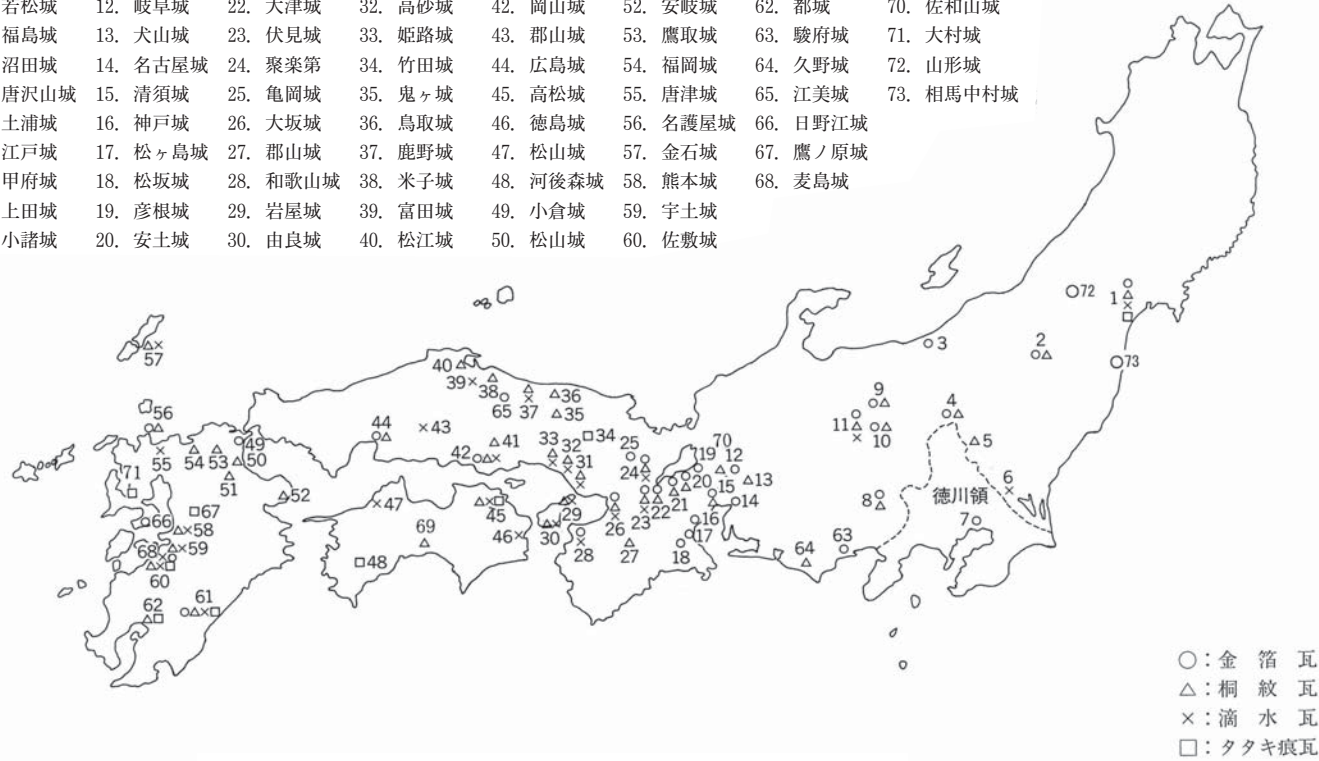


図5 金箔瓦・桐紋瓦・滴水瓦・タタキ痕瓦出土城跡一覧(中井均作成)

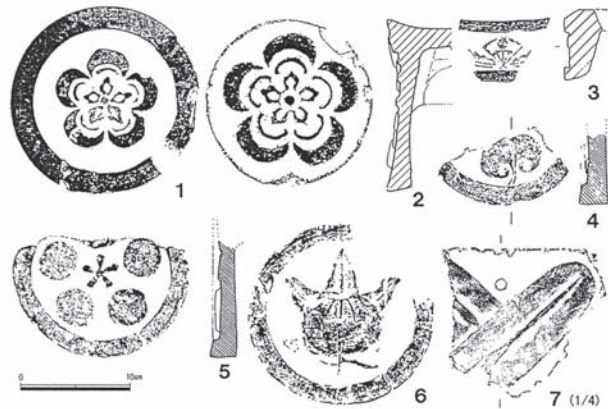


図6 聚楽第大名屋敷出土家紋瓦(加藤理文 2012 『織豊権力と城郭』)

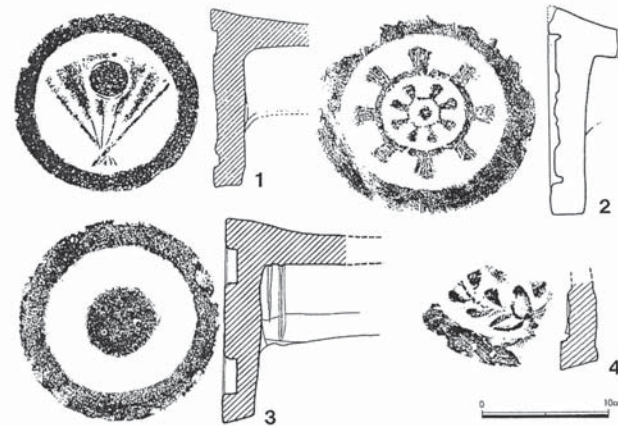


図7 伏見城下大名屋敷出土家紋瓦(加藤理文 2012 『織豊権力と城郭』)

大坂城下町とその周辺 —最近の発掘調査からみた城下町の成立—

公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
小田木富慈美

1.はじめに 大坂城と城下町(大坂城下町の成立)について・・・これまでの説のまとめ

a. 豊臣初期城下町(豊臣前期) 天正11(1583)年 大坂城築城

上(島)町城下町・北平野町城下町整備

初期の豊臣大坂城は、中世の拠点であった四天王寺と港湾施設を持つ渡辺を取り込む形で作られている。もともと人が多く住んでいた地域をつなぐように街区を作る。渡辺に関してはもともと大坂本願寺から直接結ぶ道があり、街区はこれを踏襲したのではないかといわれる。城下町の創設に際し、渡辺にいた住民は、市内7箇所に分かれて移住させられ、寺社も移転。上(島)町城下町では敷地奥にまで建物が建てられており、当初から開発が進んでいた。平野町城下町は、道路を中心とした両側町で、住民は大阪市南部の平野環濠都市から移住したとされる。築城時の石運びの道として意識されていた[豆谷・南2015]。

b. 豊臣前期城下町 天正13(1585)年 秀吉関白となる、天満本願寺建設(→1591に京都へ移転)

文禄4(1594)年 惣構堀工事、秀吉大坂城へ移る

慶長元(1596)年 慶長伏見大地震

豊臣前期には、天満本願寺を町の外に配置、中小の寺社を移転、大名屋敷は城の南・南東に作る。

文禄4(1594)年の惣構の構築によって平野町の北部が大坂城内となる。これによって、平野町を四天王寺まで続く町とする計画が頓挫。発掘調査では惣構より南の平野町では、溝以外の町屋遺構はほとんど認められない。→江戸時代に周辺は寺町として再編されるが、それ以外の地点では耕作地となる場所も多く、18世紀以降に開発が進む。この間、大坂城西側の上町城下町の南に町屋が拡大していくが、発掘調査では、三ノ丸盛土直下、豊臣前期の遺構直上に薄い粘土が堆積する場合があります、被害によって開発が中断した箇所もあったか。

c. 豊臣後期城下町 慶長3(1598)年 三ノ丸建設 大名屋敷を大坂城の南に配置 秀吉没す

慶長5(1600)年 関ヶ原の戦い

慶長19・20(1614・1615)年 大坂冬ノ陣・夏ノ陣による大坂城下町・大坂城焼亡

三ノ丸の建設によって、三ノ丸の中にいた町人(数万人か)の強制移住「町中屋敷替え」が行われる。その移住先が船場城下町であり、町場造成のため、東横堀川を開鑿、町割を行う。当初の船場西限は心斎橋筋、南限は南本町と推定される。1600年頃に西横堀の一部・阿波堀川の掘削、同年、道頓堀川の掘削開始。

d. 徳川期城下町 大坂ノ陣直後から、元和5(1619)年 松平忠明による市街地の復興、同年直轄地へ

元和元(1615)年：道頓堀川、元和3(1618)年：江戸堀、元和8(1623)年：長堀川、

寛永3(1626)年：立売堀、寛永7(1630)年：薩摩堀川 完成

直轄地となって以降、急速に海岸部へと市街地化がすすむ。市内10以上の村が市街地化され、消滅する。

明暦元(1655)年の絵図には、海岸部まで町場が続く様子が描かれる。この頃の人口は20万人弱か。各堀川の完成によって、17世紀前半にはほぼ町場はできあがっているが、船場周囲の発掘調査では、初期伊万里段階(1630年代)以前の遺構は少なく、17世紀中葉にかけて遺構・遺物が急激に増加する地点が多い。

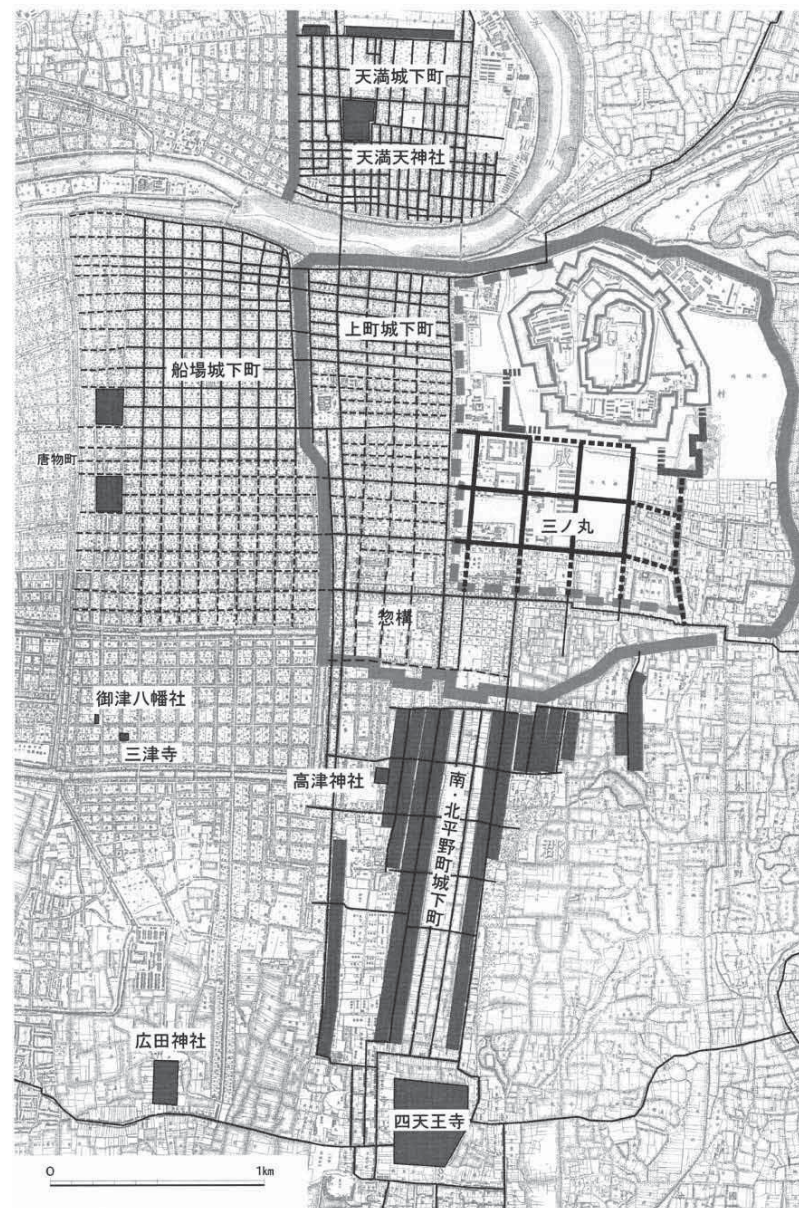


図1 豊臣後期の大阪城下町推定図(松尾信裕氏作成[松尾2017b]図6を転載)

ここで用いる時期区分
大坂本願寺期：明応5(1496)年：本願寺創建～天正8(1580)年：本願寺焼亡
豊臣前期：本願寺焼亡～慶長3(1598)年：三ノ丸築城開始
豊臣後期：三ノ丸築城～慶長20(1615)年：大坂夏ノ陣

2. 最近の調査から得られた新たな知見

(1) 大坂城下町(船場)の西・南で見つかった、大坂冬ノ陣で焼失する屋敷地

IB05-1 礎石建物 博列建物検出

OJ08-2 大型の礎石建物検出

UT08-1 礎石建物検出

HB13-1・14-1 礎石・瓦葺建物検出

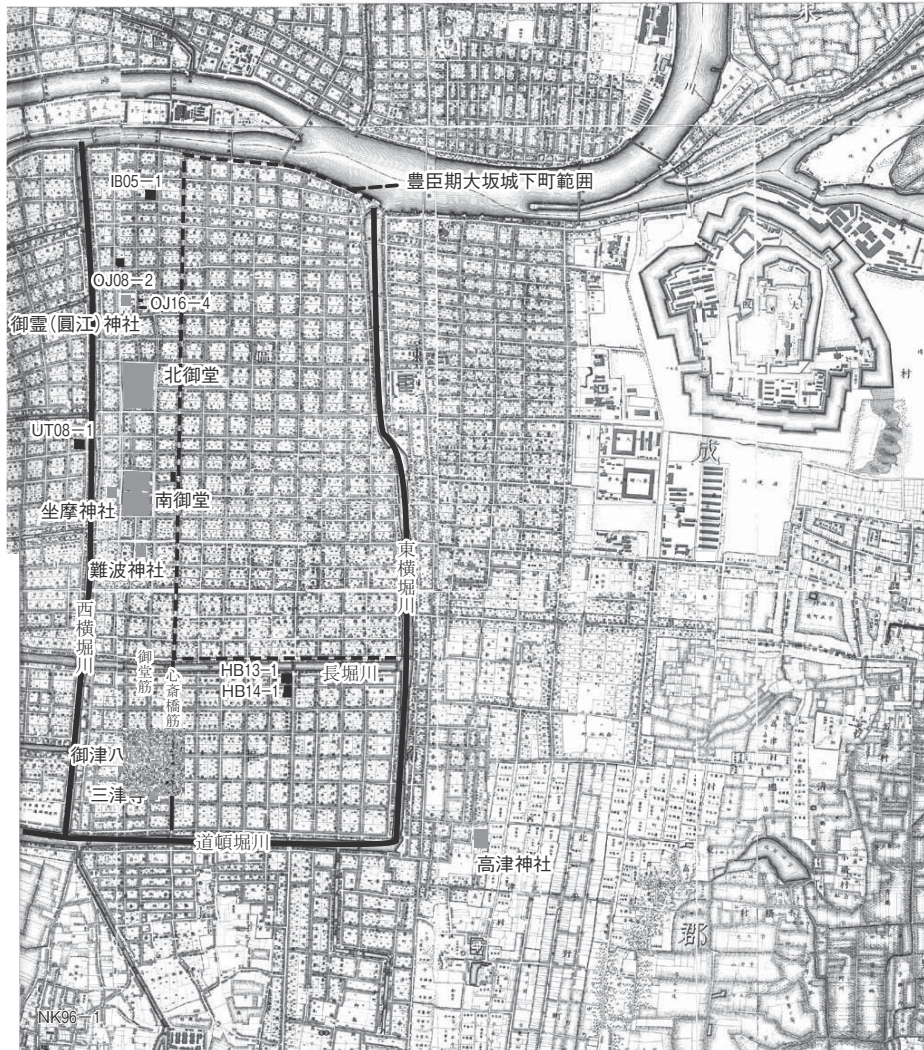


図2 明治時代の地図と調査地(明治20(1887)年内務省発行『大阪実測図』)

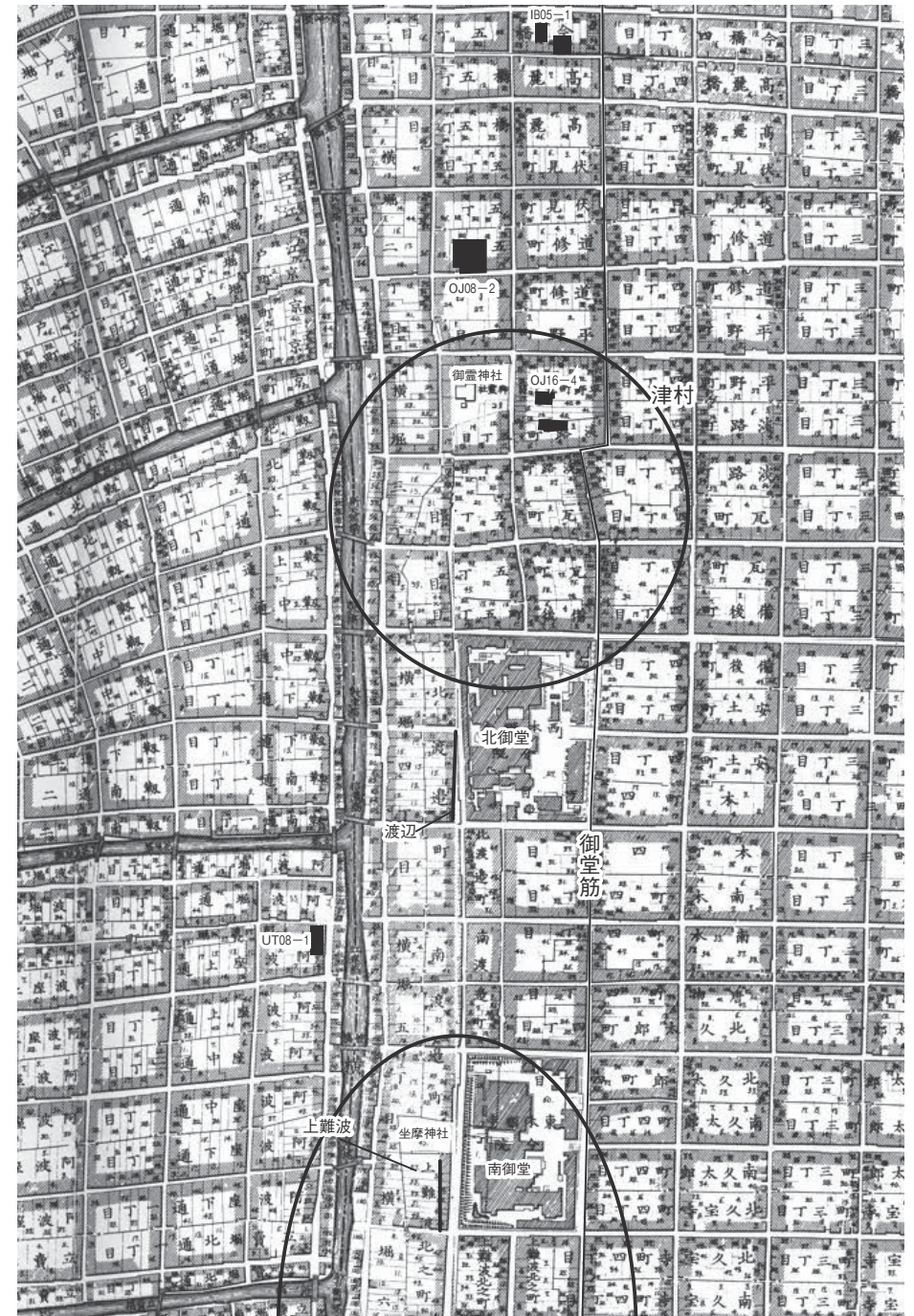


図3 明治時代の地図と調査地(図2を拡大)

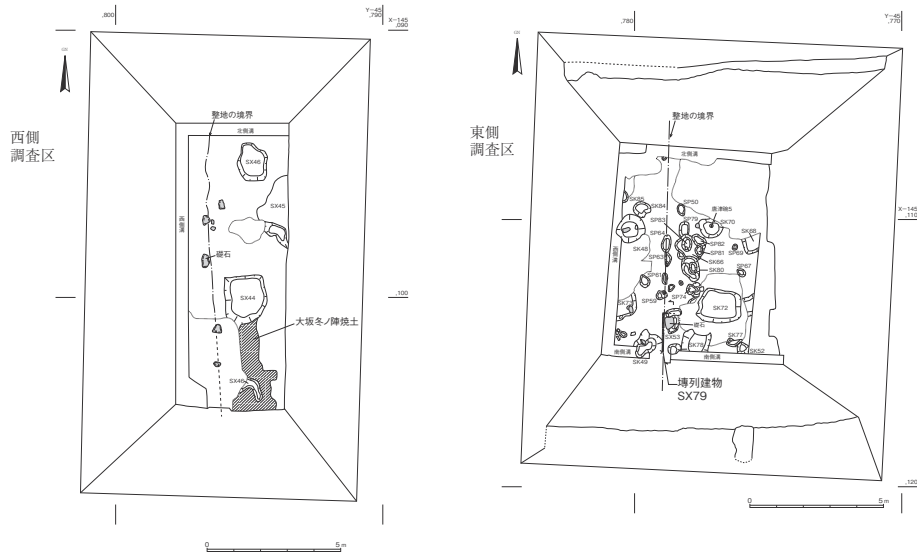


図4 IB05-1次調査の遺構[大市教・大文協 2006] (一部改変)

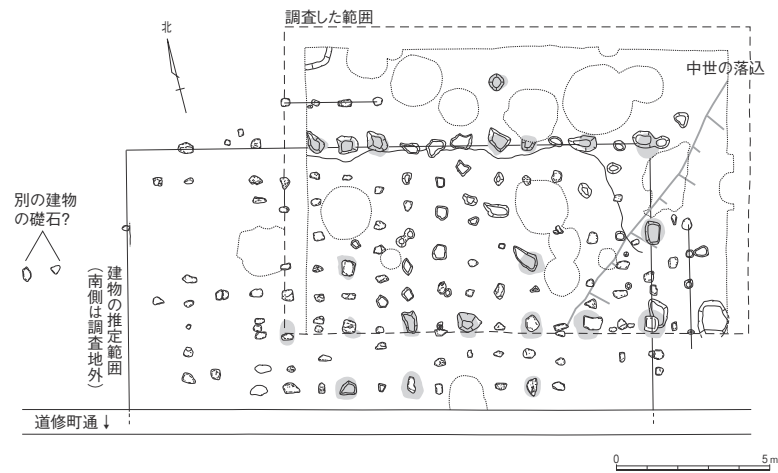


図5 OJ08-2次調査の遺構[大市教・大文協 2010] (一部改変)

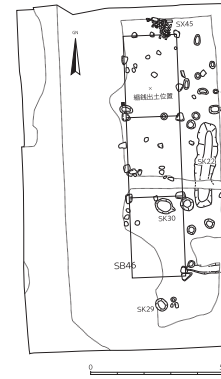


図6 UT08-1次調査の遺構
[大市教・大文協 2010]

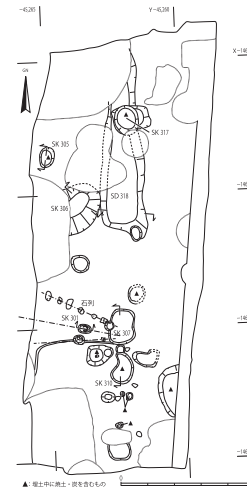


図7 HB13-1次調査の遺構
[大市教・大文研 2015] (一部改変)

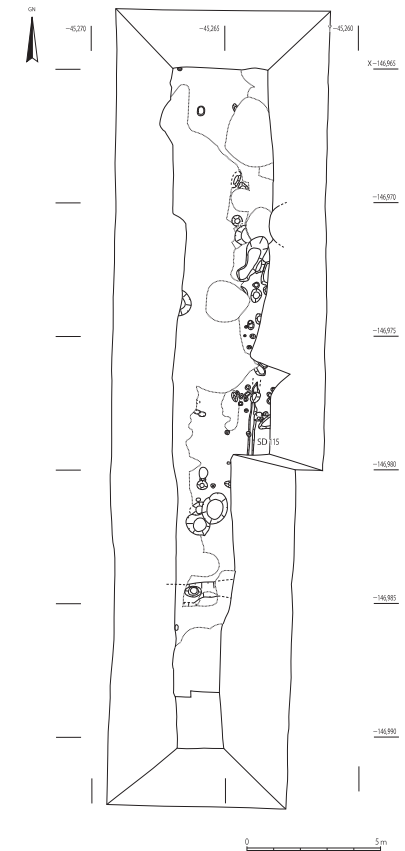


図8 HB14-1次調査の遺構
[大市教・大文研 2016] (一部改変)

IB05-1 整地の境界や建物の方位はほぼ近世以降と合うか・・・島町城下町の延長線上
 OJ08-2 道修町通を超えて南に建物が伸びる可能性あり・・・道修町通りはなかった
 UT08-1 礎石建物の方位は北でわずかに西に振る・・・近世以降の方位とややずれる
 HB13-1・14-1 礎石・溝の方位は北で東に降る可能性・・・近世以降の方位と合致しないものあり
 以上の豊臣後期の遺構には、街区の規制を受けないもの、街区と方位の一致しないものがあり、その地点は城下町外だった可能性が高い。慶長4(1599)年、秀頼の大坂居住に続いて家康が大坂城西の丸に入る。翌年、伏見から大名がこぞって大坂へ移転したため、必要な敷地を船場城下町外に求めたか[松尾2017b]。

* 図4～15の文献は以下の通りに略記する
 (大阪市文化財協会：大文協、大阪文化財研究所：大文研、大阪市教育委員会：大市教)

小田木資料④

(2) 中世の集落と豊臣の大坂城下町

中世集落の立地 (1)で述べた遺構が見つかった地点の周辺、大坂城・城下町下町周辺には、中世(鎌倉～室町)の集落が立地している。立地環境は、大川の河岸や湾岸からそう遠くない微高地、上町台地上やその縁辺である。文献史料上からは、渡辺津・津村・三津(寺)・難波のほか(西)高津・森が知られる。

渡辺津(高麗橋から天満周辺)

(文献史料より)

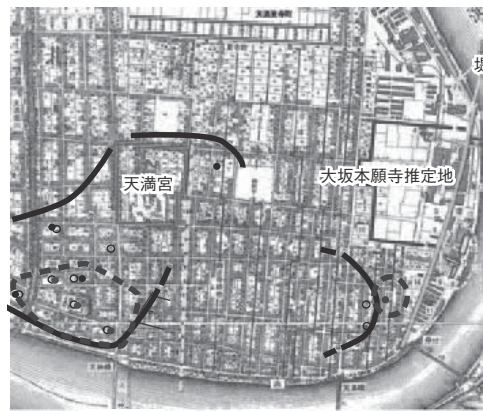
奈良～平安時代東大寺領新羅江荘、10世紀～摂津大江御厨房(朝廷蔵人所の直轄領)渡辺荘、頭成荘(12～14世紀文献にあり)が存在。9世紀頃に摂津国府の港「渡辺津」が開かれ、11世紀末～16世紀にかけて在郷武士であった渡辺氏の本拠地であったとされる。発掘調査の結果、文献史料等からの推定地よりも西側の天神橋・高麗橋周辺一帯に遺構が集中、高麗橋付近が中心とみられる。

寺院や神社については、天満地区では大阪天満宮が10世紀初頭より存在、天正13～19(1585～1591)年の7年間天満本願寺が存在。高麗橋付近では、渡辺津の鎮守社坐摩神社、渡辺氏の氏寺薬師堂のほか、渡辺浄土堂(渡辺別所)・来迎堂・娑婆堂、熊野参詣で九十九王子の第一王子社である窪津王子が所在(12～13世紀が最盛期)。

(発掘調査の成果)

大川の北では鎌倉時代までは大阪天満宮の南西・南東の2か所でまとまりが見られる。室町時代の14世紀後半になると遺構・遺物の分布地点が減少、集中するか。16世紀はわずかととなる。

対岸の高麗橋付近一帯では、鎌倉時代は広範囲に遺構・遺物が分布し、14世紀後半以降は検出域が移動、遺物出土量が減少する。



寺内町推定範囲 堤の位置
 平安時代後半の遺構分布範囲
 鎌倉・室町時代の遺構分布範囲

図9 天満本願寺・大阪天満宮と周辺の調査

([南 2017] 図1をもとに一部加筆)

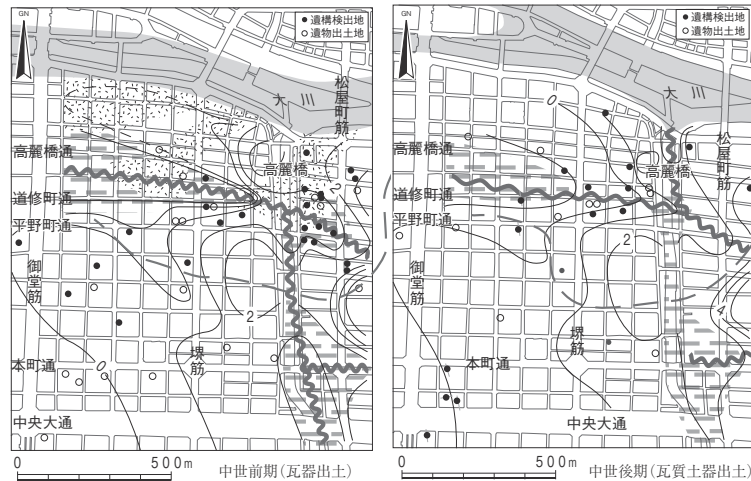


図10 高麗橋から船場周辺の中世遺構分布([大文協 2004] 図294・295を改変)

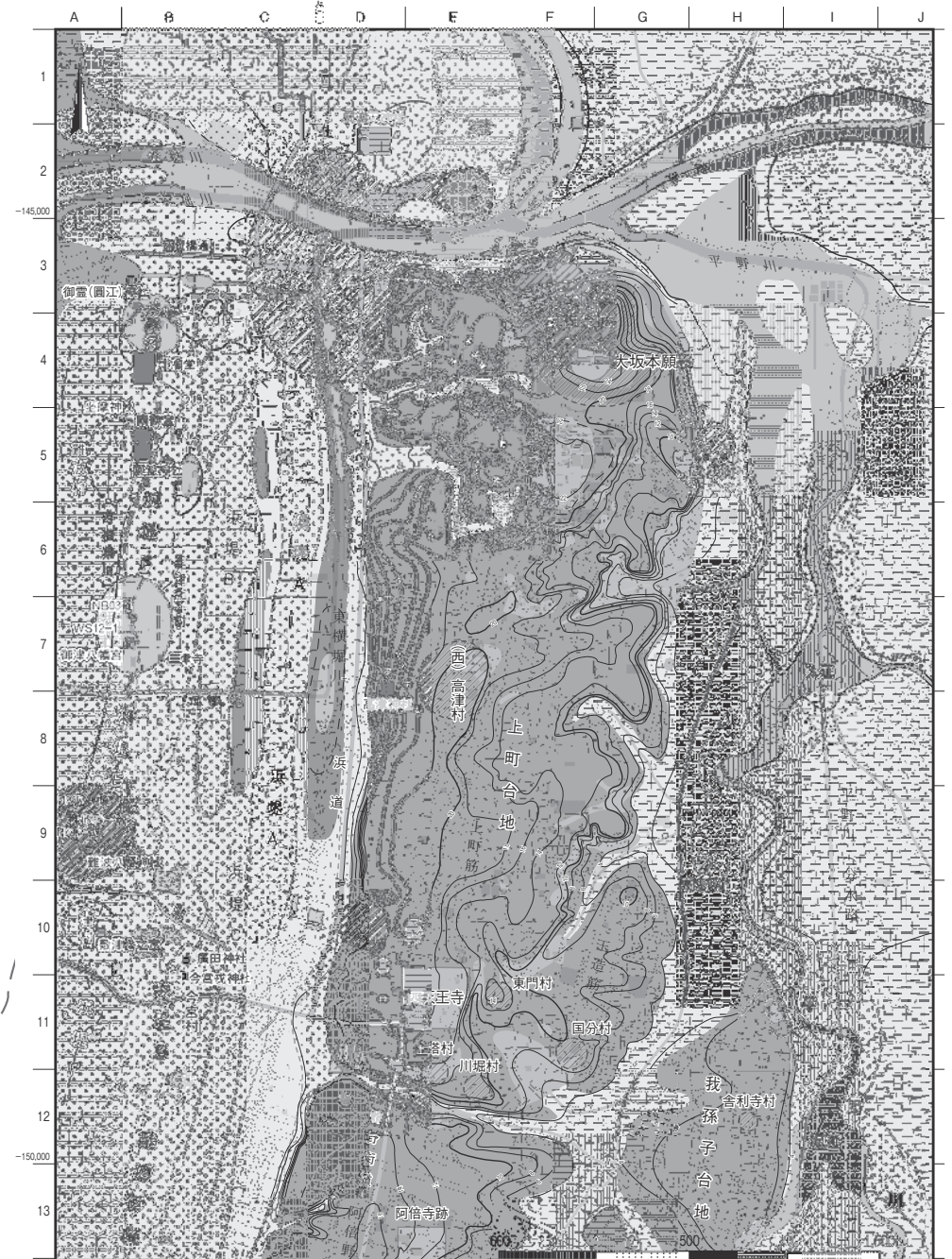


図11 中世後期の古地理図([大文研・大阪歴史博物館 2014] 巻頭図版6をもとに一部加筆・改変)

津村

〔文献史料より〕 撰津大江御厨(朝廷直轄荘園)で元弘3(1333)年の文獻『内蔵寮領等目録』にある津村郷に相当するか。明治時代の地図では、北御堂の北側に「津村」が見える。『渡辺惣官家文書』では、享禄年間(1528~1532)の記述に渡辺荘の飛び地とみられる「津村龍安寺領」の名が見えるほか、永禄9(1566)年、渡辺・津村の被官百姓に対する記載あり。天文4(1535)年、細川晴元と本願寺の戦いで焼ける『私心記』。

寺院・神社などは、豊臣前期：文禄3(1594)年、御霊(圓江)神社が鞆本町付近より移転(石州津和野藩の祖亀井茲矩侯が邸地を割いて寄進)。慶長2(1597)年、津村御坊(北御堂)が渡辺から移転。

〔発掘調査の成果〕 OJ16-4次調査で13世紀の井戸・土壇・溝・小穴を確認。14世紀後半以降遺物は少なく、居住を示す遺構はなし。周辺では北で西に振る方位の溝が見られる=西成郡北部の条里方向に合致し、古代から地割方向が踏襲される。御堂筋以東では、鎌倉時代までの遺物は散見されるが室町時代以降は激減。

三津(寺)村

〔文献史料より〕 御津が語源か?現在の島之内西端に地名「三津寺」が残る。石清水八幡宮の荘園であった。承久2(1220)年、『石清水文書』に「撰津国三津寺、畠三段在八幡河合」の記載あり。『石清水文書』の応永22(1415)年に「撰津国三津寺荘田畑注進」とある。大坂本願寺攻めの史料で天正4(1576)年に三津寺砦の記載あり。豊臣期に直轄とされ、検地帳に記載あり。江戸時代、元和元(1615)年の水帳に屋敷42筆とある。

寺院・神社などについては、三津寺(真言宗)が8世紀に創建、豊臣前期の文禄年間(1592~1596年)に僧賢愚が中興したが、19世紀に焼失、再建して現在に至る。三津八幡宮は8世紀に成立か。先の記載より13世紀にも存在、文禄年間に焼失、その後再建されている。

〔発掘調査の成果〕 調査件数が少ない。NB03-1次調査で13~14世紀前葉の遺構検出、WS12-2次調査で15世紀の溝検出、HB16-2次調査で13世紀の瓦器出土。中世の集落は御堂筋の西側か。文献史料では本願寺期後半~豊臣期には現在地付近に村があった可能性あり。古代の顕著な遺構は近隣にはなし。

難波村

〔文献史料より〕 難波荘に比定される。『祈雨法御書』に難波荘は久寿元(1154)年の記述に王家領とあり、本所は崇徳上皇の御願寺成勝寺である。『渡辺惣官家文書』延元2(1337)年の記述に、渡辺惣官渡辺照が難波荘の地頭職となるとある。応安4(1371)年・応永8(1401)年の同文書から、難波に渡辺氏の「堀屋敷」があり、「難波地頭屋敷一町八段大二十四歩」の規模であったことが知られる。〔大阪市史編纂委員会1989〕ではこの機に渡辺氏が本拠地を高麗橋周辺から難波方面に移したとされる。『渡辺惣官家文書』によると、応安2(1369)年以前に難波村と木津浦との間に境界相論があったことから、村は少なくとも木津の北に位置しており、遅くとも、16世紀後半までには上難波・下難波村の2箇村に分かれていたと推定される。江戸時代、元和5(1619)年の文書には、下難波村が幕府領となって農地は堀や町屋に、上難波村や周辺も町屋となったことが書かれる。明治時代の地図からは、上・下難波村のおおよその位置が推定できる。

寺院・神社などについては、上難波村では、天正元~5(1573~1577)年に4つの真宗寺院が開創されている〔大澤2000〕。天正10(1582)年、坐摩神社が渡辺津(石町付近?)から移転。天正11(1583)年、難波神社が上本町付近から現在地に移転、慶長3(1598)年、難波別院(南御堂)が渡辺より現在地に移転。下難波村では牛頭大王を祭る難波八阪神社(難波下の宮)が11世紀後半頃には存在したとされる。

〔発掘調査の成果〕 上難波村付近では室町時代の溝が確認されるのみ。下難波村(鮎川北)では、NK12-1次調査で12世紀の集落遺構確認、NK96-1・NB16-1次調査で15・16世紀の溝あり、遺物多数出土。

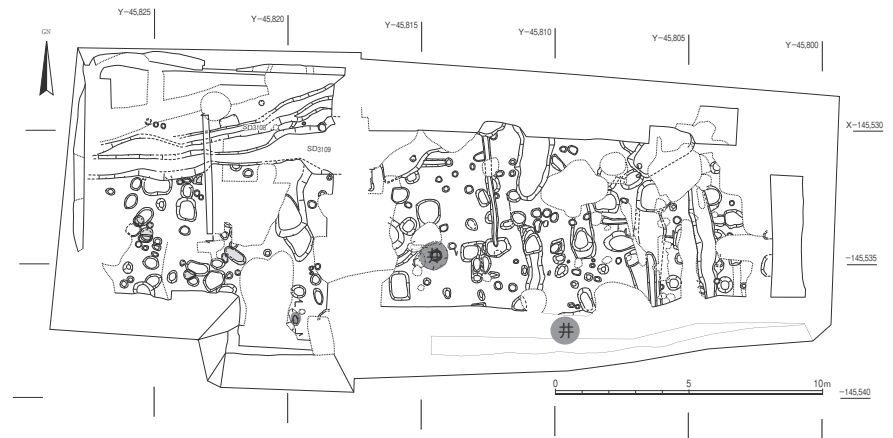


図12 OJ16-4次調査の遺構〔大文研 2017b〕(一部改変)



図13 NB03-1次調査の遺構
〔大市教・大文協 2004〕

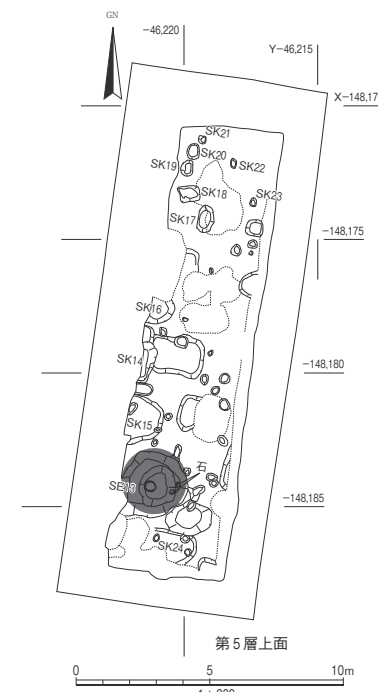


図14 NK12-1次調査の遺構

〔大市教・大文研 2014b〕(一部改変)

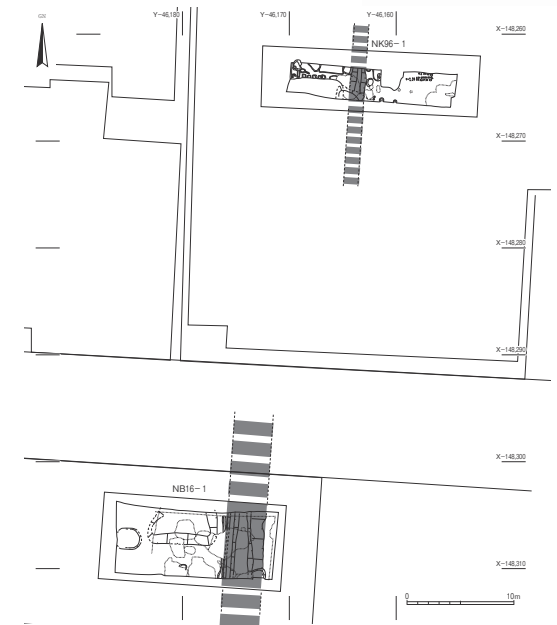


図15 NB16-1・NK96-1次調査の遺構〔大文研 2017a〕(一部改変)

小田木資料⑥

4.まとめ

(1)中世集落の変質と歴史的背景

・集住傾向の高まり

後に大坂城下町となる地域のうち、天満・船場城下町周辺では、鎌倉時代の遺物・遺構検出地点は広範囲に分散しているが、室町時代以降に同規模で、同じ位置に分布が続くところはなく、次第に検出地点が減少、中心が移動することが指摘できる。15世紀代では、渡辺津周辺と下難波に遺構・遺物が集中し、津村・三津・上難波付近にも遺構はあるが、遺物は少ない。後の御堂筋付近から東側では、西成郡北部の条里方向に合致した溝が見られ、耕地が多くを占めた可能性が高い。16世紀の遺構・遺物の分布はさらに限定的となる。大阪平野一帯では室町時代以降、周囲に堀を巡らす都市や集落が出現し、都市としては堺・平野、集落としては、荻田・山之内など多数が知られる。四天王寺周辺でも多数の堀が掘られる。戦乱の続いた結果、集住化が進み、大坂本願寺の北から西にかけての一带においても、集落の分布状況は周辺地域と同様で、居住地と耕作域が明確に分かれていた可能性が高い。のちに天満・船場城下町となる地域は、渡辺津を除き、耕作地西の浜堤上に小集落が点在するだけだったため、都市計画が比較的容易だったと推察する。

・中世集落と道路

上町台地西の道：従来から、四天王寺西門より上町台地を下り、台地西辺に沿うように北の渡辺津へ向かう直線的な道路が推定されている。道沿いには高野山と結ぶ九十九寺の伝承地が続く(窪津王子・坂口王子・郡戸王子・上野王子)。この道路は中世の文献にある浜道に比定されている。(『中右記』天仁2(1109)年、「行浜路、過天王寺西海辺、未一刻着窪津」：[大澤2013])。道筋の東は台地際の崖、西は後に東横堀川の掘削される凹地であり、海岸線からは2km弱離れる。

海岸沿いの道：鎌倉時代までに津村郷・渡辺津は渡辺氏の領地であったが、室町時代初めには難波荘までが同氏の支配下となった。その際、渡辺氏は本拠地を南へ移したと推定されている[大阪市史編纂委員会1989]。発掘調査の知見からは、14世紀代以降に颯川北岸の浜堤上で集落が発展し、渡辺氏の難波荘支配と関連づけられる可能性がある。ほどなくして起こった、難波荘南の木津との間での境界争いの後、豊臣期までには(下)難波と木津の集落境は颯川となっていた可能性が高い。石山合戦の頃には本願寺の外港として、木津が物資輸送の拠点となった。多くの集落が渡辺氏に続き本願寺の支配下となったこれらの地域では、地形復元と集落の位置、文献史料等から総合的に考察すると、渡辺津から西へ向かい、浜堤沿いに点在した集落を蛇行しながら南へ結び、木津の集落・港に繋がる道が発生していたことが推定される。地形復元からみて、津村から渡辺までは水域の南に東西道があったと推定される。津村・上難波付近の御堂筋沿いには町屋の正面が筋に向く筋町の痕跡が残り、南・北御堂や御霊・坐摩・難波神社が東正面であることから、御堂筋の一部はこの道筋に該当する可能性がある(寺院や敷地の正面は既にあった道に規制されたと推定)。また、三津付近では、慶長14(1609)年の検地帳、元和6(1620)年の「三津寺町屋敷書上帳」に「かいとう(街道カ)」の記載があり、旧屋敷と街道、上島を合わせて三津寺町を創設し、町割りを行ったと推定されている[脇田修1994]。ここから難波・木津へは、明暦元(1655)年の「大坂三郷町絵図」で描かれるような、心齋橋筋から南の今宮へ向かい、難波・木津へ枝分かれする道が存在したとみられる。

(2)豊臣大坂城下町計画と中世集落

・平野町 = 石運びの町 ・島町 = 渡辺津と大坂城を結ぶ ・天満 = 本願寺と寺内町を取り込む

・船場 = 町屋 ・周辺は基本的に農地だが、一時期大名・武家屋敷が立地(既存集落の周辺か)

大坂城下町(船場)では町割り計画を立てる際に、集落や道路、地形を目安として、西端となる直線道(心齋橋筋：惣尻切)、島町城下町と角度の違う東西道(通り)を割付けた可能性がある。その際、主な寺社を城下町外へ配置するが、移転は豊臣前期に開始しており、城下町の計画がその前にできていた可能性を示す。船場では元の地形を利用し、東横堀川、道頓堀川、西横堀川の掘削によって排水を行うとともに、揚土で低い土地のかさ上げを行うことを計画。天満では築堤と堀川の掘削によって、浸水を防ぐ。これらの豊臣の大坂城下町計画をベースとして、徳川期の城下町づくり(堀川掘削とかさ上げ)があった。明治18年淀川大洪水の際に描かれた浸水範囲図からは、豊臣氏が目指し、徳川が引き継いだ城下町の形が看取される。

資料作成にあたり、大阪歴史博物館 松尾信裕・大澤研一・豆谷浩之氏に多大なご教示を戴きました。ここに記して、感謝致します。

参考文献

*論文・単著等

伊藤毅1987、『近世大坂成立史論』生活史研究所

内田九州男1989、「豊臣秀吉の大坂建設」：『よみがえる中世 本願寺から天下一へ 大坂』平凡社

大阪市史編纂委員会1989、『新修大阪市史』第2巻

大阪市史編纂委員会1990、『新修大阪市史』第3巻

大阪文化財研究所・大阪歴史博物館2014、『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』平成21～25年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究A研究成果報告書

大澤研一2000、「戦国期大坂の本願寺門徒衆と寺院」：『大坂城と城下町』思文閣出版、pp395-410

大澤研一2001、「中世大坂の道と津」：『大阪市立博物館研究紀要』第33号

大澤研一2013、「並び立つ都市の時代－中世上町台地の様相－」：『大阪上町台地から都市を考える』シンポジウム発表資料集、pp34-40

松尾信裕2013、「近世城下町大坂の誕生と拡大」：『大阪上町台地から都市を考える』シンポジウム発表資料集、pp41-48

松尾信裕2017a、「近世における大坂市街地の拡大」：『共同成果報告書』11、大阪歴史博物館、pp4-13

松尾信裕2017b、「城下町大坂の建設と拡大」：『豊臣期における大坂と摂河泉』城下町科研大阪研究会資料集、pp27-40

豆谷浩之・南秀雄2015、「豊臣時代の大坂城下町」：『秀吉と大阪 城と城下町』和泉書院上方文庫別巻シリーズ6、pp237-264

南秀雄2017、「豊臣時代にあった天満本願寺」大坂城 豊臣石垣公開プロジェクト 豊臣石垣コラム <http://www.toyotomi-ishigaki.com/hideyoshi/1701.html>

脇田修1994、「近世前期、都市域における土地権利」：『大坂と周辺諸都市の研究』、pp91-108

*報告書

大阪市文化財協会2004、『大坂城下町跡Ⅱ』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004、『平成15年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014a、『平成24年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014b、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)』

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)』

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2016、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2014)』

大阪文化財研究所2017a、『浪速区元町二丁目7-27における建設工事に伴う浪速区元町遺跡発掘調査(NB16-1次)報告書』
大阪文化財研究所2017b、『中央区平野町四丁目18他・淡路町四丁目45-1他における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(OJ16-4)報告書』

伏見城

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
山本 雅和

①指月城

- ・沿革
豊臣秀吉が文禄元年（1592）に宇治川に臨む指月の岡に隠居屋敷を造営
文禄3年（1594）天守などを備えた本格的な城郭として拡張整備
文禄5年（1596）閏7月13日の大地震により建物が倒壊
- ・城郭中核部
南側は宇治川・東側は舟入により区画される
伏見区桃山鍋島町で北西角と推定できる石垣を発見 立売通は北堀跡を街路として整備
内部を区画する石垣・段差・堀の発見
- ・城下町
街路・街区の整備がすすめられたことが明らかとなる

②木幡山伏見城

- ・沿革
豊臣秀吉が木幡山周辺の東西約3.3km・南北約2.2kmの範囲に造営した大規模な城郭
本丸・天守は最高所である現在の明治天皇陵の位置
秀吉没後は徳川氏の支配下におかれる
慶長5年（1600）関ヶ原の合戦前哨戦で西軍の攻撃を受け落城 翌年再建
元和9年（1623）徳川家光の将軍宣下を最後に廃城・破却
- ・城郭中核部
大部分が桃山陵墓地に含まれる
地形図や古絵図から本丸・二の丸・松丸・名護屋丸などの配置が推定されている
発掘調査で出丸・堀、北堀石垣などが見つかる
- ・武家屋敷
城郭周辺部を雑壇状に造成、多数の武家屋敷が造営される
豊後橋通より東側に東西約130m、南北約125mの方形区画の地割を施工
周囲は石垣・堀・堀などで区画される
内部は分厚い整地が行なわれ、大型建物を含む複数の建物が配置される
京町通東側を中心に金箔瓦・家紋瓦が出土
- ・町屋
城下町を南北方向に縦貫する京町通・両替町通を中核として集められる
南北方向に細長い長方形の街区に街路に面して小規模な建物が建ち並ぶ
街区内の敷地背割りに当たる位置に段差が設けられる
城下町南部の立売通沿いでも町屋を検出

③城下町周辺の整備

- ・城下町の周囲には惣構と呼ばれる土塁・切岸や空堀・水濠を構築
- ・伏見港の整備
- ・太閤堤の構築による宇治川・淀川の制御
- ・宇治橋の撤去と豊後橋の架設
- ・向島城の築城

伏見城関連略年表

年号	西暦	出来事
延暦13	794	桓武天皇、平安京遷都。
大同元	806	桓武天皇を伏見柏原陵に埋葬。
貞観4	862	清和天皇、御香宮を修繕。
延久年間	1070頃	橋俊綱、伏見山荘を営む。和歌などに「伏見」の語があらわれる。
嘉保元	1094	橋俊綱没。伏見山荘と所領は弟家綱が伝領。その後家綱はこれを後白河院に献上。
文治2	1186	後白河院、新造なった伏見殿御所へ移る。
承久3	1221	承久の乱。北条泰時、宇治川から伏見を攻める。
建長3	1251	伏見庄が後嵯峨院の所領となり、以後、伏見庄は持明院統に属す。
貞治2	1363	光厳院、伏見庄を大光明寺領として崇光院の相伝とする（伏見宮家の成立）。
応永22	1415	伏見庄の支配権をめぐる、土豪の三木・小川両氏の間にしばしば確執あり。
応永23	1416	伏見宮貞成親王、『看聞御記』執筆開始。文安5年（1448）まで続く。
天文3	1534	足利義晴、伏見山に城郭をつくる。
天正13	1585	7月 豊臣秀吉、関白に就任。
天正14	1586	2月 秀吉、聚楽第造営開始。 12月 秀吉、太政大臣に就任。
天正15	1587	9月 秀吉、大政所・北政所らと大坂城より聚楽第へ移る。
天正16	1588	4月 後陽成天皇、聚楽第行幸。
天正17	1590	8月 秀吉、奥州平定。天下を統一する。
天正19	1591	12月 秀吉、関白を甥の秀次に譲る。
文禄元	1592	3月 文禄の役始まる。 8月 秀吉、伏見指月に新屋敷の造営開始。
文禄2	1593	9月 秀吉、指月城へ移る。
文禄3	1594	3月 秀吉、指月城（伏見城）の拡張工事に着手。淀城破却。資材を伏見城に移す。 8月 秀吉、伏見城へ移る。城下町造成のため、予定地域の村落・社寺を移転。 7月 秀吉、伏見城へ移る。
文禄4	1595	7月 秀吉、伏見城へ移る。
慶長元	1596	閏7月 鳥羽・伏見を震源地とした慶長大地震が起こり伏見城全壊。死者は城内600人、住民2000人に達する。直後より木幡山に伏見城再建工事が開始される。
慶長2	1597	1月 慶長の役始まる。 5月 秀吉、秀頼と伏見城へ移る。
慶長3	1598	8月 秀吉、伏見城で死去。伏見城は五奉行が交替で護持。
慶長4	1599	閏3月 徳川家康、向島城から伏見城に入る。
慶長5	1600	8月 石田三成側の西軍、伏見城を攻め落とす。本丸・松の丸・名護屋丸以下が焼亡。 9月 関ヶ原の戦いで家康側の東軍が勝利。
慶長6	1601	3月 伏見城復旧工事開始。家康、大坂城より伏見城へ移る。 5月 家康、伏見に初めて銀座を設置し、丁銀・小粒銀を鋳造。
慶長7	1602	5月 家康、二条城を造営。
慶長8	1603	2月 家康、伏見城において征夷大將軍の宣下を受ける。 10月 幕府、河村・木村の両氏に淀川の過書船の管轄をまかせる。
慶長9	1604	12月 幕府、南浜に伝馬所を新設。伏見撞木町に傾城町復興を許可。
慶長10	1605	4月 徳川秀忠、伏見城において將軍宣下を受ける。 8月 幕府、伏見城中制法を下す。御香宮本殿を現在地に再興。
慶長12	1607	閏4月 松平定勝、伏見城代となる（伏見奉行の初代か）。
慶長18	1613	幕府、角倉了以に京都三条―伏見間の高瀬川の開削を行わせる。
慶長19	1614	大坂冬の陣。
慶長20	1615	大坂夏の陣。5月、秀頼・淀君自害。豊臣死滅亡。
元和元	1615	このころ、鶴幸右衛門、伏見で土偶人形をつくる（伏見人形の起源か）。
元和4	1618	小林勘次、角倉家の過書船の独占ならびに運賃高騰に対して幕府に直訴。
元和9	1623	7月 徳川家光、伏見城で將軍宣下を受ける。その後伏見城は破却。天守を二条城に移す。
寛永元	1624	10月 家光、二条城を拡張。
寛永3	1626	9月 後水尾天皇、二条城行幸。
元禄11	1698	伏見奉行建部内匠頭、伏見の復興策として伏見船200艘の新造を認可。
元禄12	1699	建部内匠頭、中書島を開発。
享保7	1722	堀井長円、葭島新田（石高600石余）を開発。
明和年間	1770頃	このころ、伏見の人口は27,450人を数える。
天明5	1785	伏見町人文殊九助ら、伏見奉行小堀政方の暴政を幕府に訴える（伏見騒動）。
天明6	1786	このころ、伏見の酒造家は28軒、仕込米高6,876石。
天保年間	1840頃	このころ、伏見の人口は40,980人に増加する。
文久2	1862	寺田屋事件が起こる。
元治元	1864	長州藩家老福原越後、兵300人を率いて伏見に入る（禁門の変）。
慶応3	1867	伏見奉行が廃止され、伏見は京都町奉行の支配下に入る。
明治元	1868	鳥羽・伏見の戦い。
明治45	1912	明治天皇を伏見桃山陵に埋葬。
大正3	1914	昭憲皇太后を伏見桃山東陵に埋葬。

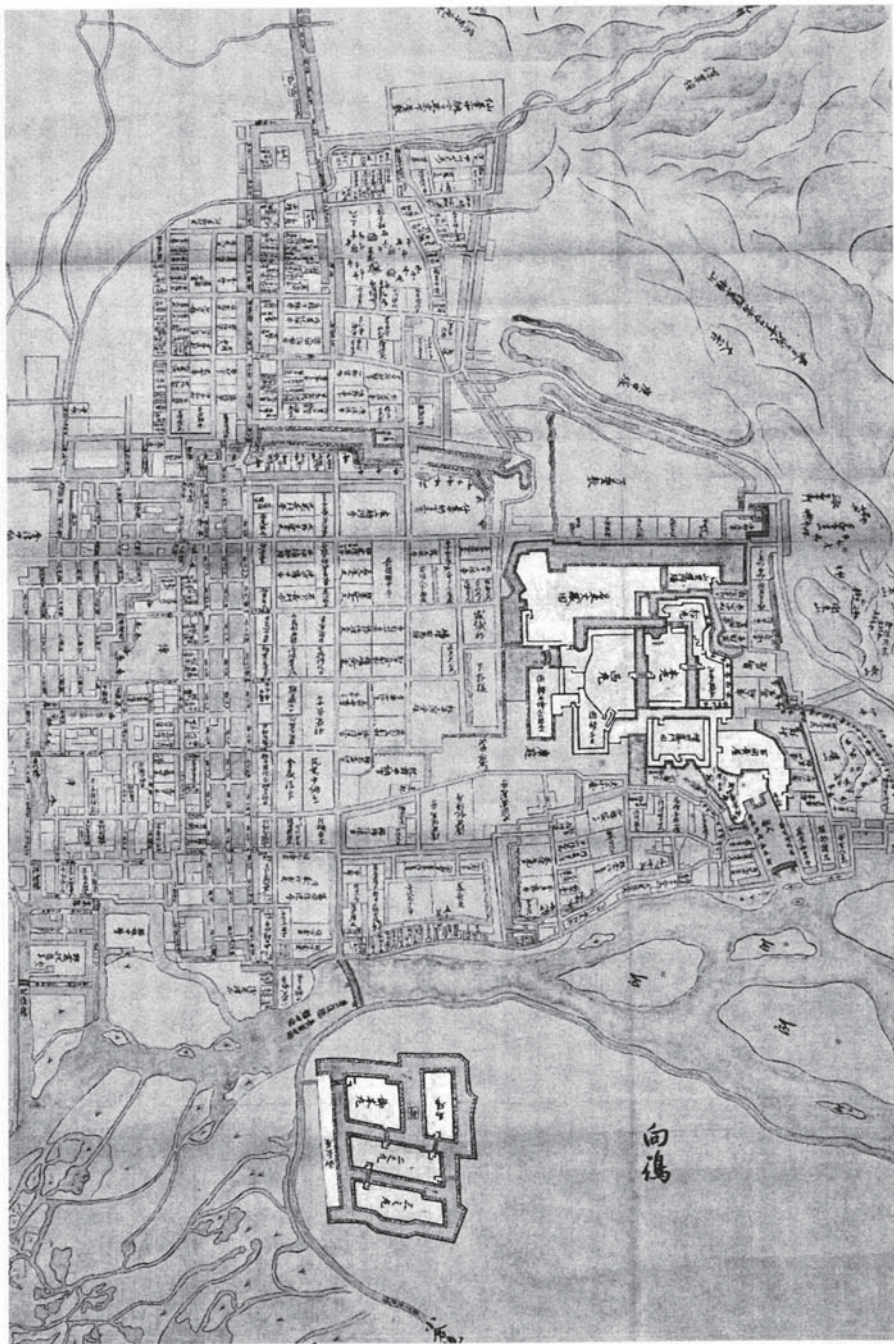


图1 『伏見城城郭並屋敷取之絵図』(京都市管理)

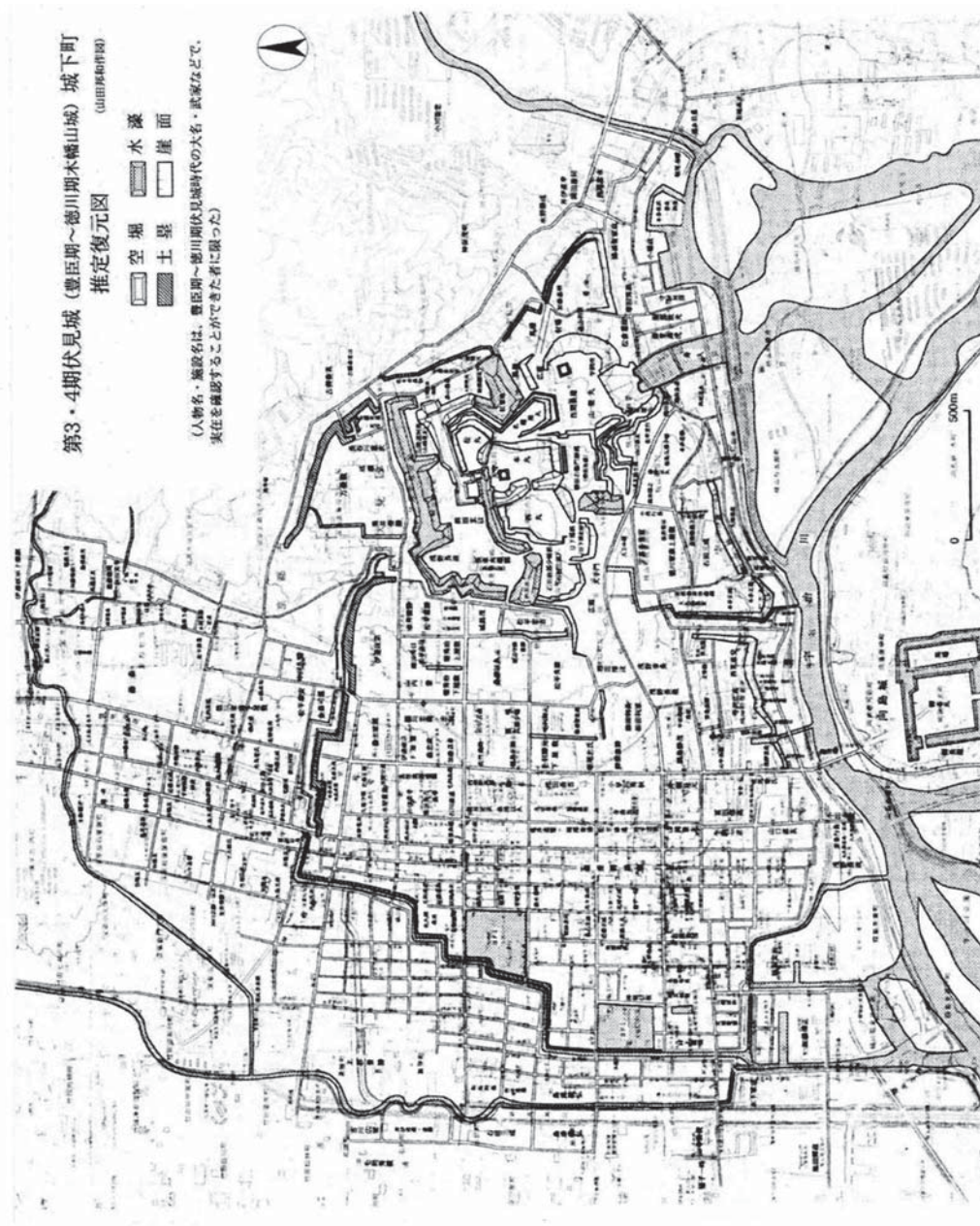


图2 伏見城城下町推定復元図 (山田邦和氏作製)

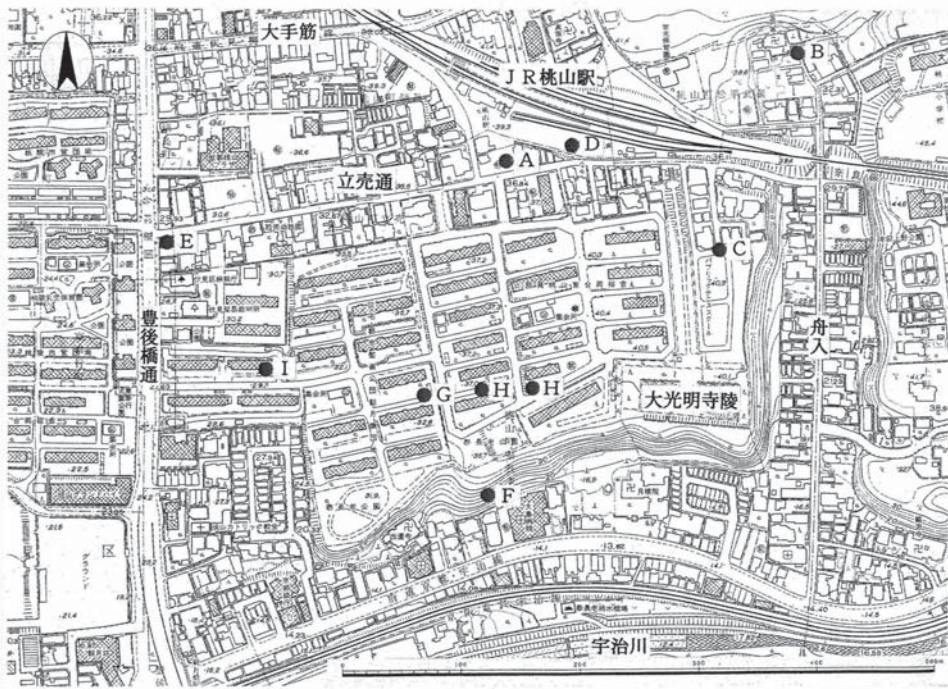


图3 指月城調査地点位置図

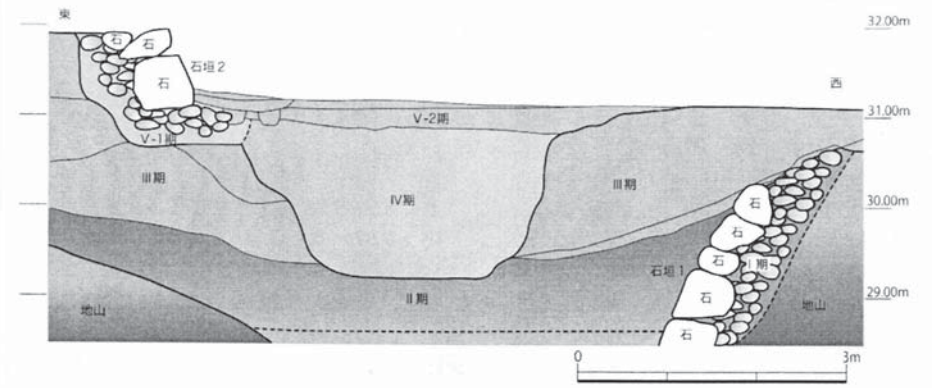


图5 G地点石垣・変遷模式図 (画像提供：京都市文化財保護課)

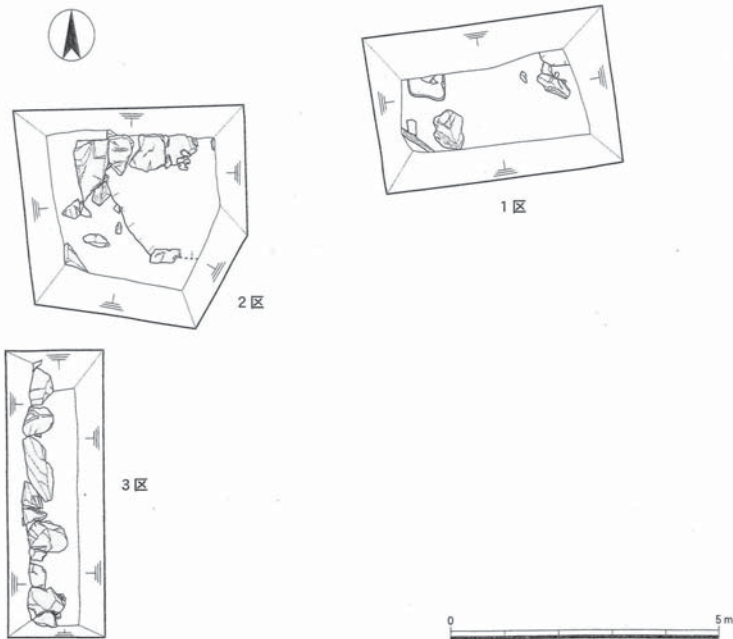


图4 E地点石垣(「伏見城跡(09FD133)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成21年度』京都市文化市民局 2010年)



图6 I地点石垣 (画像提供：関西文化財調査会)

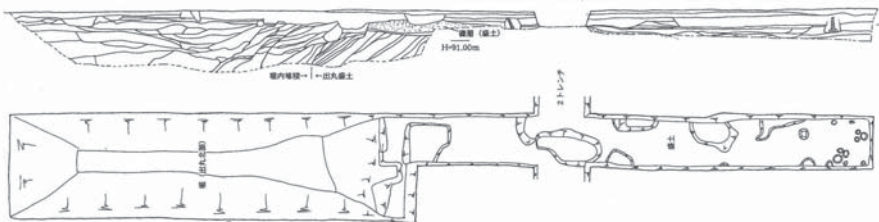
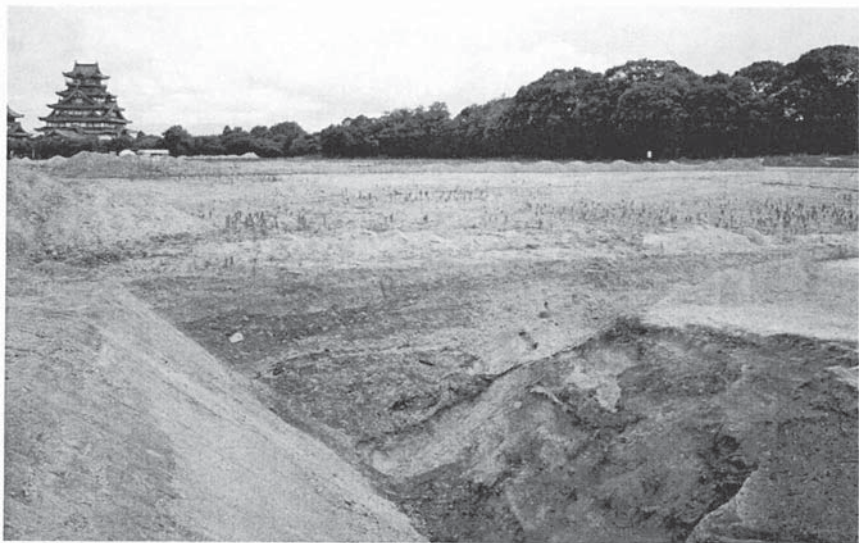


図7 北堀・出丸（「伏見城跡1」『平成16年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006年）



図8 北堀の石垣（『伏見城跡発掘調査報告』伏見城研究会 1989年）

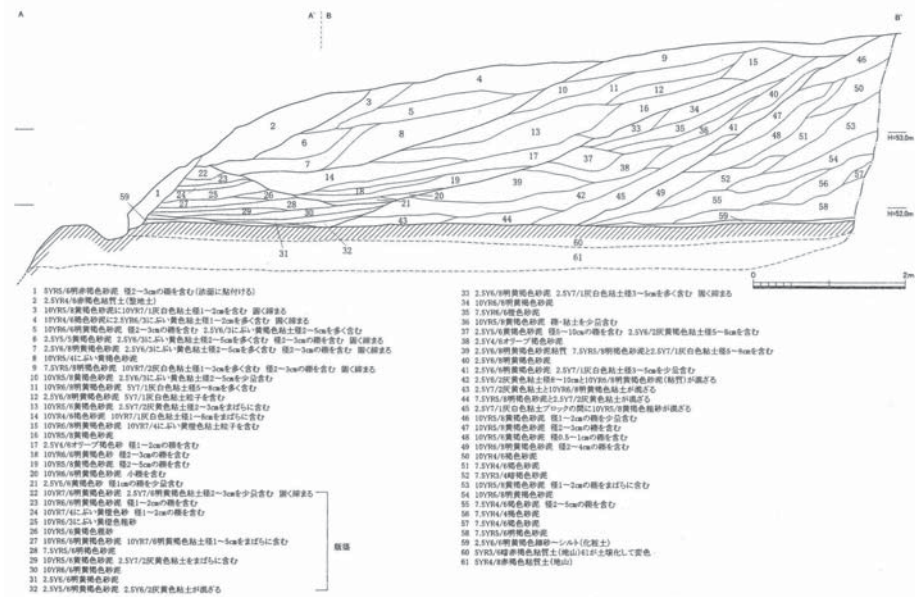
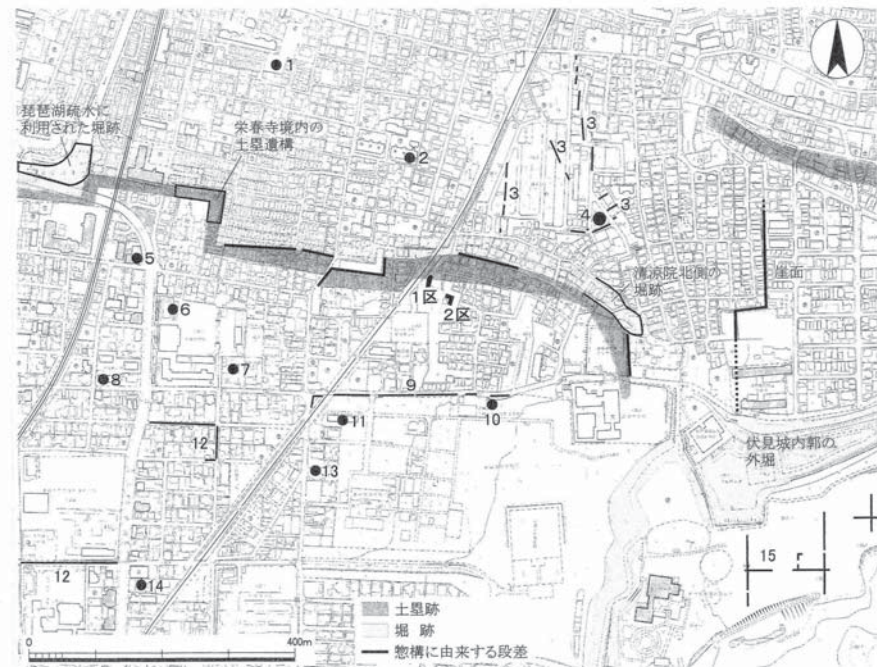


図9 惣構の北辺土塁（『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-17（財）京都市埋蔵文化財研究所 2013年）

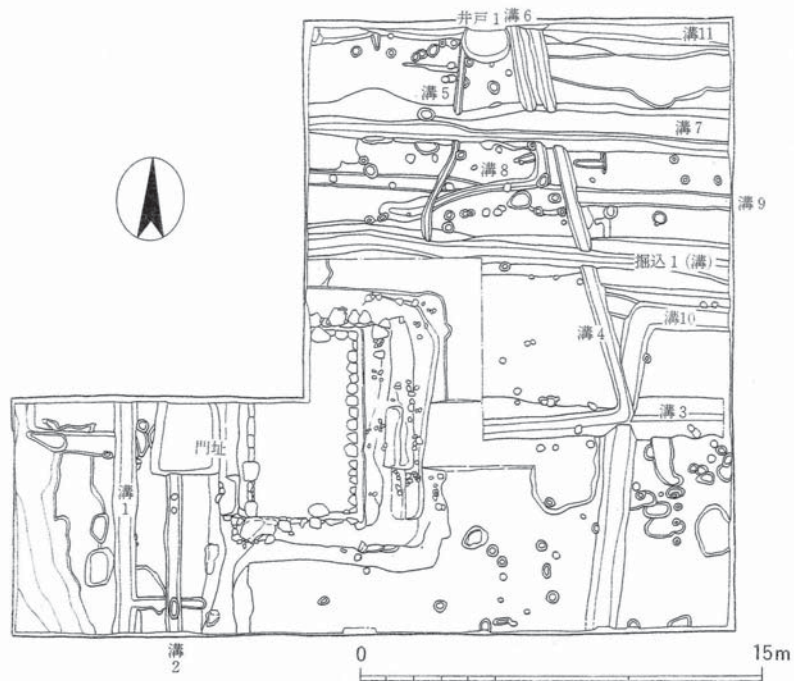


図10 武家屋敷【桃山町森出雲】（『伏見城跡2』『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年）

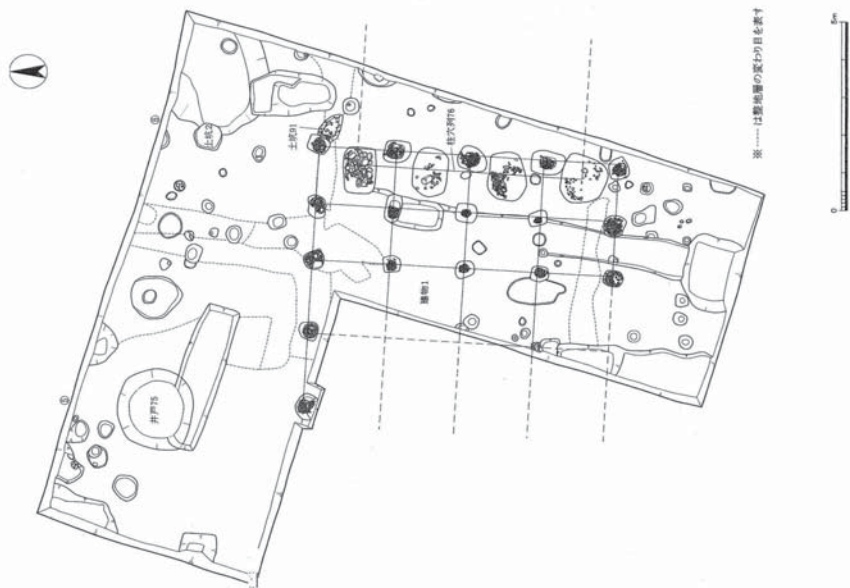


図11 武家屋敷【桃山町正宗】（『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-17（財）京都市埋蔵文化財研究所 2013年）

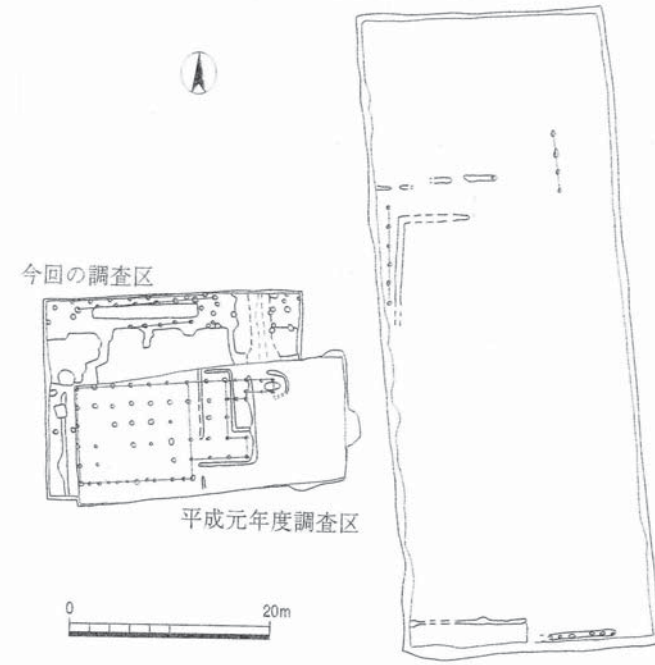


図12 武家屋敷【桃山町松平筑前】（『伏見城跡・御香宮廃寺』『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年）

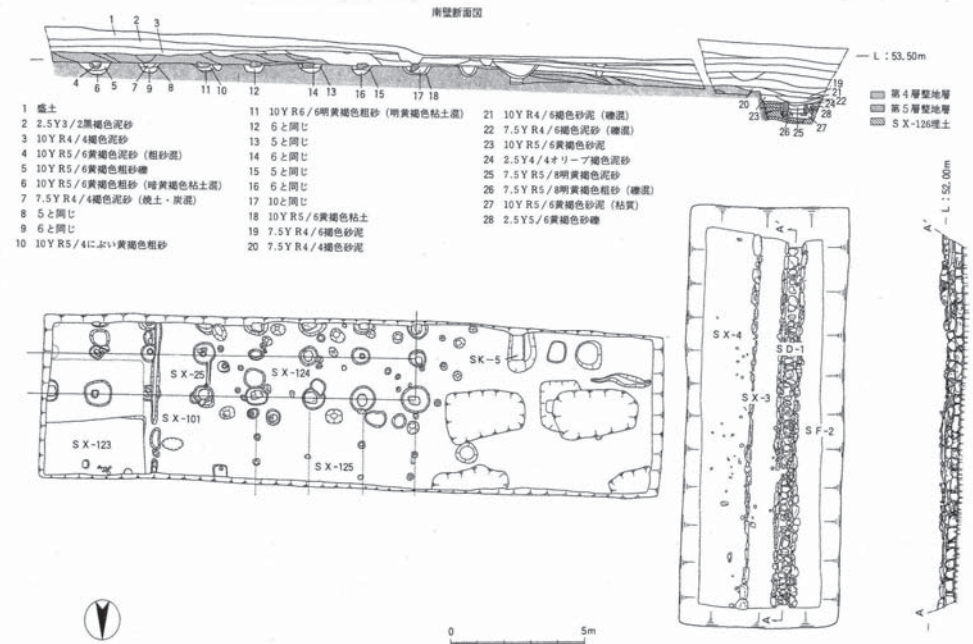


図13 武家屋敷【桃山町永井久太郎】（『伏見城跡(FD32)』『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年）

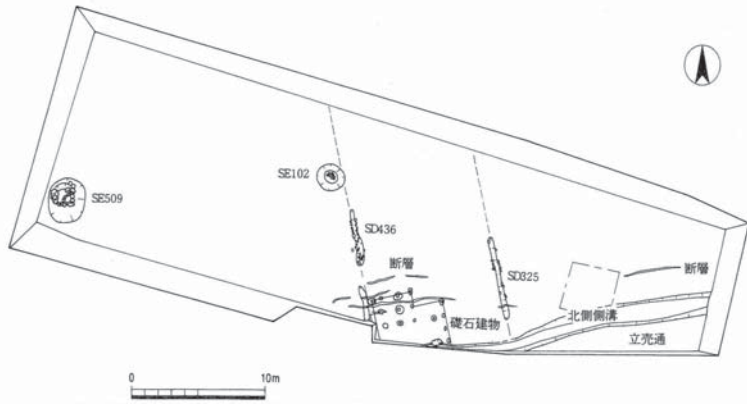


図14 町屋【桃山町立売】（『伏見城跡』『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年）

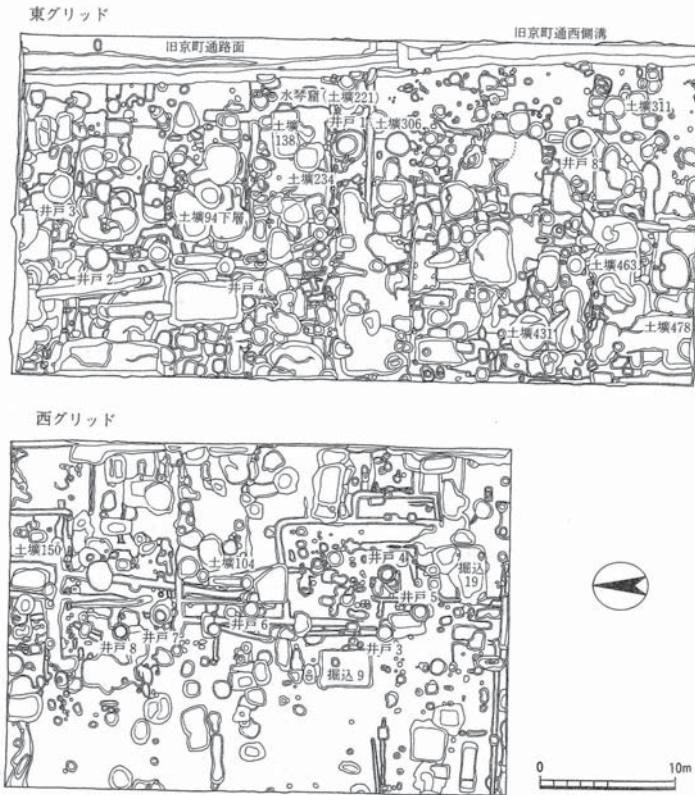


図15 町屋【京町南七丁目】（『伏見城跡2』『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年）

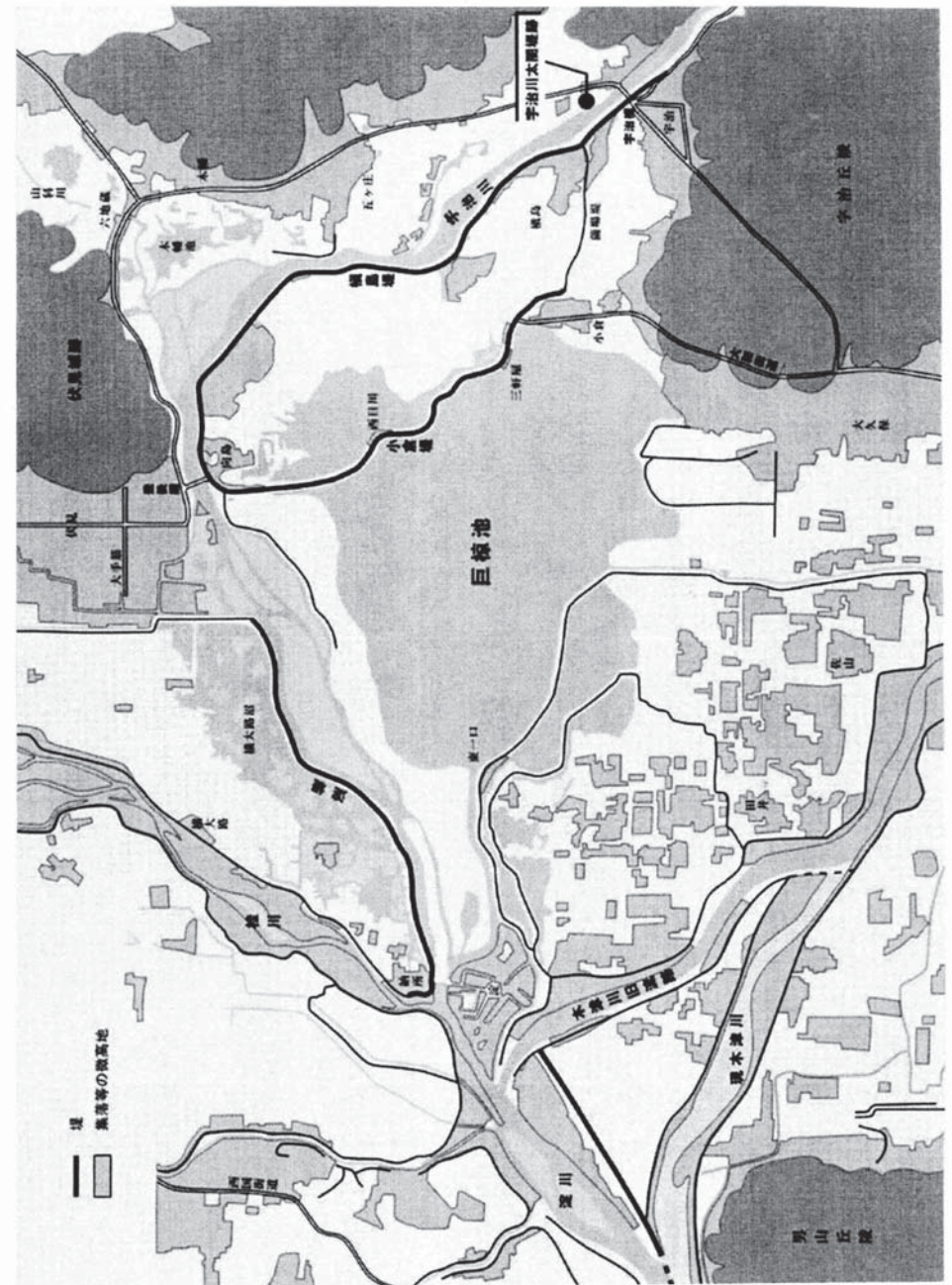


図16 太閤堤復元図(宇治市作成)

和歌山城

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター 北野 隆亮

はじめに。

和歌山城の歴史と概要

和歌山城と城下町の埋蔵文化財としての扱い(図1・2)

史跡和歌山城・和歌山城跡のうち史跡部分

和歌山城跡・・・三の丸と城下町の一部

鷲ノ森遺跡・・・本願寺跡と城下町の一部

1. 和歌山城内部(史跡和歌山城)の調査

- (1) 丘陵部(図3~7)・・・発掘調査で緑泥片岩石垣の構造が明らかとなる。
- (2) 二の丸(図8・9)・・・西部は江戸時代前期に西内堀を埋立て拡張した際に埋没した浅野期の榎台石垣の一部を検出したほか、江戸時代後期の大奥関連遺構を確認した。

2. 和歌山城外郭(和歌山城跡)と鷲ノ森遺跡の調査

- (1) 三の丸(図10~12)・・・北外堀(市堀川)は浅野期に開削されたことを確認した。
- (2) 鷲ノ森遺跡(図13~15)・・・戦国時代の本願寺堀の検出によって、城下町建設時に鷲ノ森本願寺別院周囲の中世地割がそのまま残存したことが明確になった。

3. 発掘調査成果からみた和歌山城下町成立期の様相

桑山(豊臣)期~浅野期の内郭石垣を石材・構造等から3時期に区分(図16~18)。

- (1) 第1期(緑泥片岩)は天妃山石切場(図19)から緑泥片岩を供給した段階。緑泥片岩石垣の分布から、東西の内堀は掘削が開始されている。
- (2) 第2期(緑泥片岩+砂岩自然石、砂岩自然石)は天妃山石切場に加えて、加太海岸から砂岩自然石が供給された段階。内郭北西部に限りみられることから、北外堀から分岐した西外堀が開削され運河として使われたと推定。
- (3) 第3期(砂岩割石)は友ヶ島石切場(図20)から石材を供給した段階。内郭石垣築造位置から、北外堀から分岐して東外堀が開削され運河として使われたと推定。

おわりに。

【主な引用・参考文献】

井馬好英・西村歩 2015 「鷲ノ森御坊の戦国末期惣堀と橋梁遺構 ―鷲ノ森遺跡第13次調査成果から―」
『和歌山県内文化財調査報告会資料集 地宝のひびき』公益財団法人和歌山県文化財センター
公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団 2015年『和歌山城跡第18次発掘調査報告書』
財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2003年『和歌山城跡 第9次発掘調査概報』
和歌山市教育委員会 2013年『和歌山市内遺跡発掘調査概報 ―平成23年度―』
和歌山市産業部和歌山城管理事務所 1999年『史跡和歌山城 石垣保存修理報告書』
和歌山市まちづくり推進室和歌山城管理事務所 2007年『史跡和歌山城御橋廊下復元及び二の丸西部・西之丸第一期整備報告書』

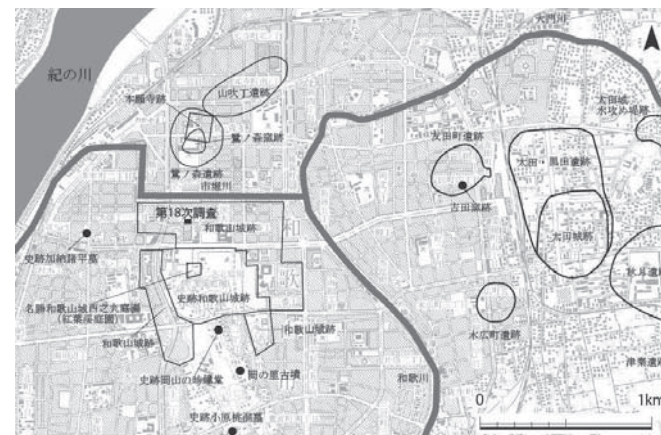


図1 和歌山城周辺遺跡分布図

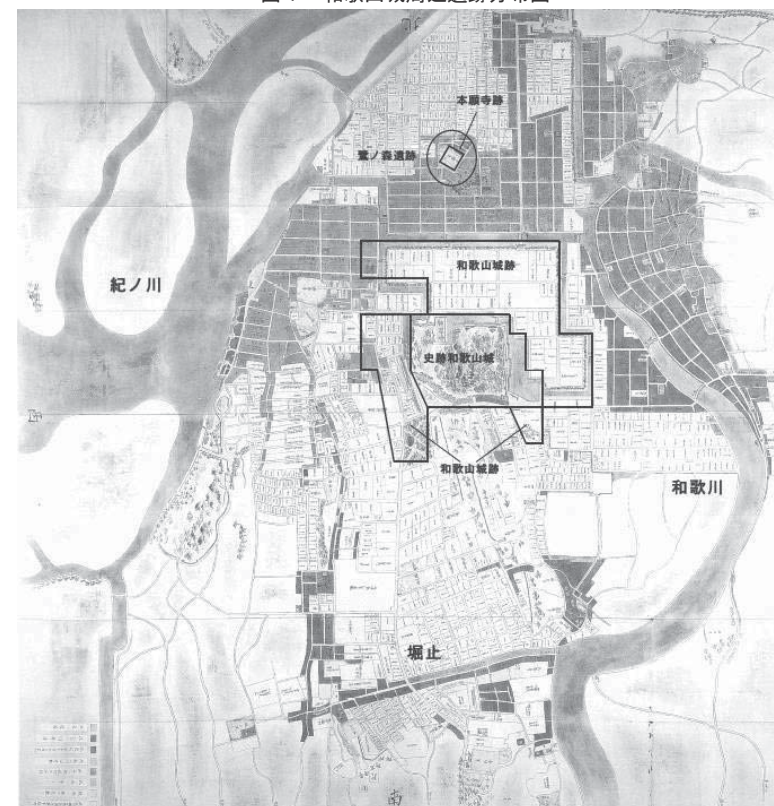


図2 和歌山城下町絵図(和歌山市立博物館蔵)に遺跡範囲等加筆

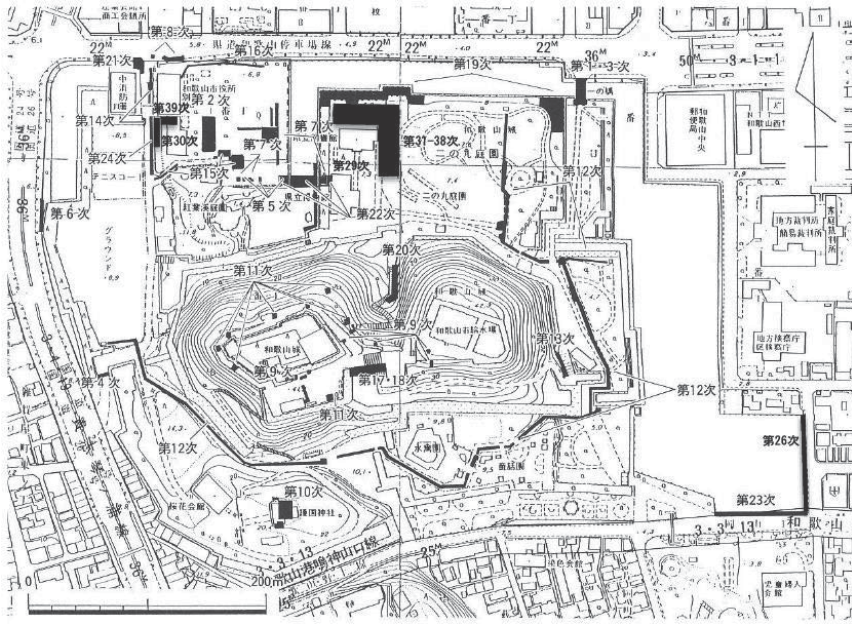


图3 史跡和歌山城調査区位置図

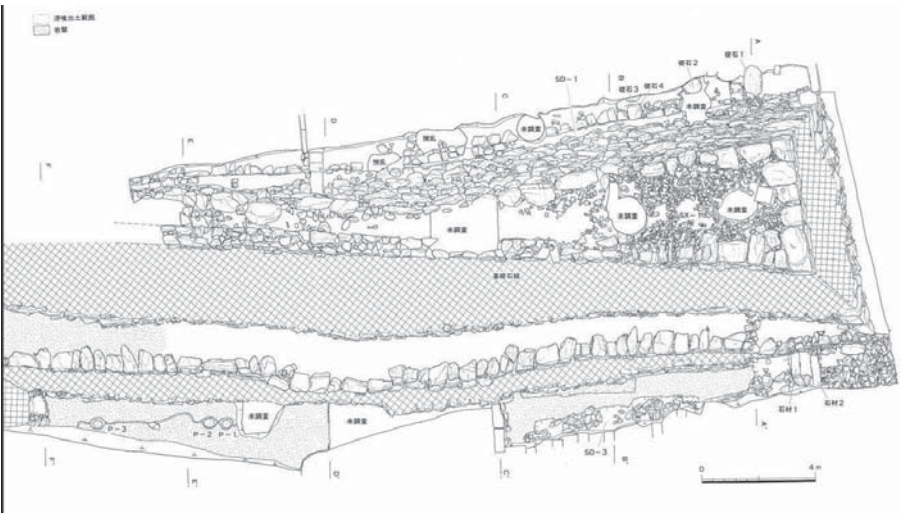


图4 史跡和歌山城第17・18次調査遺構平面図

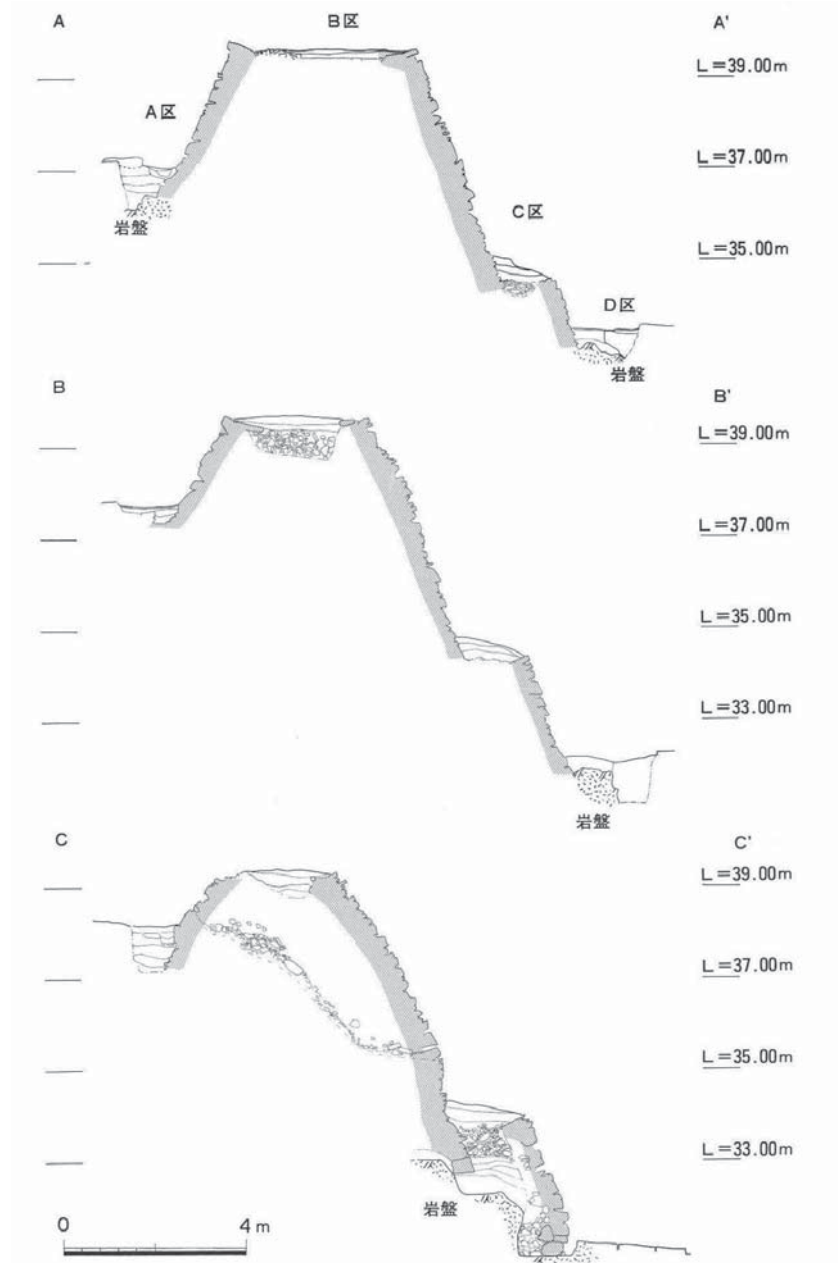


图5 史跡和歌山城第17・18次調査石垣断面土層図

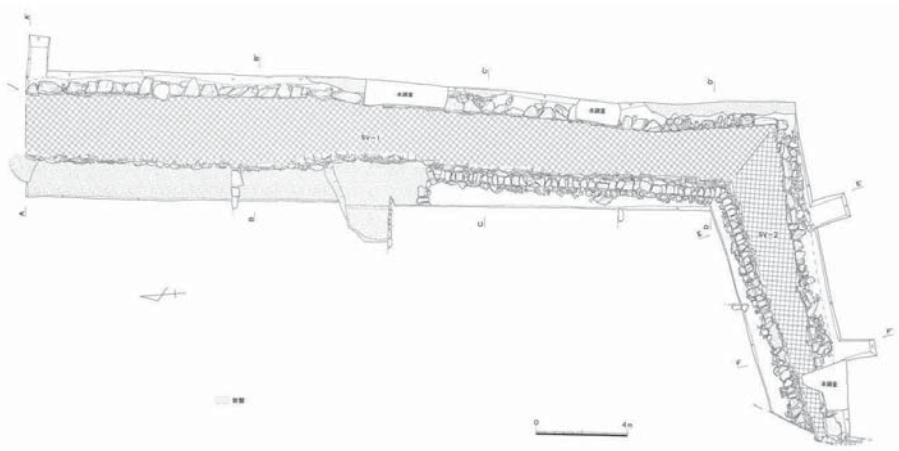


图6 史跡和歌山城第20次調査遺構平面図

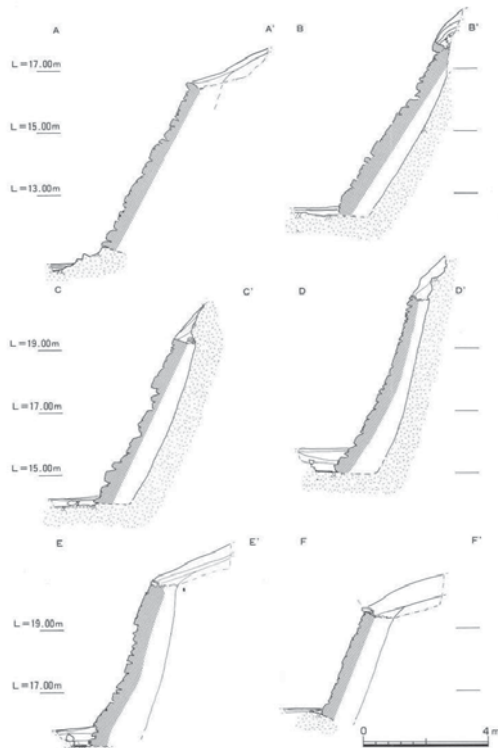
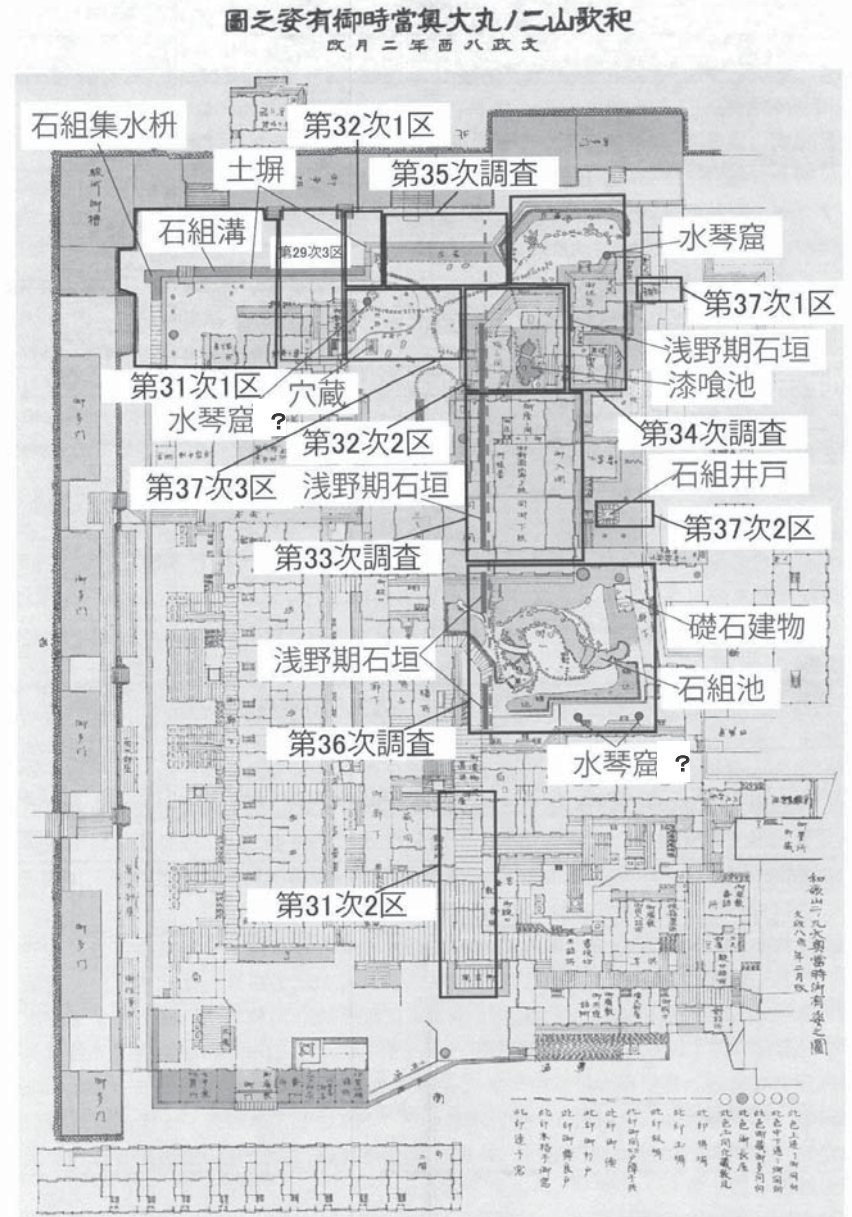


图7 史跡和歌山城第20次調査石垣断面図



史跡和歌山城 二之丸大奥の調査位置 (第31-37次調査)

图8 「和歌山城二ノ丸大奥當時御有姿之図」に調査区と主な検出遺構を加筆

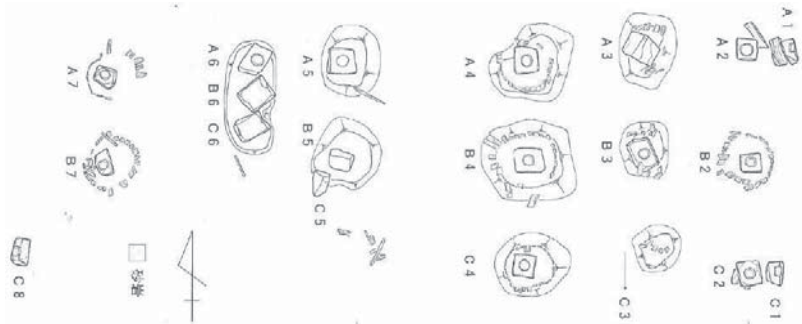


图9 御橋廊下橋脚基礎遺構平面図

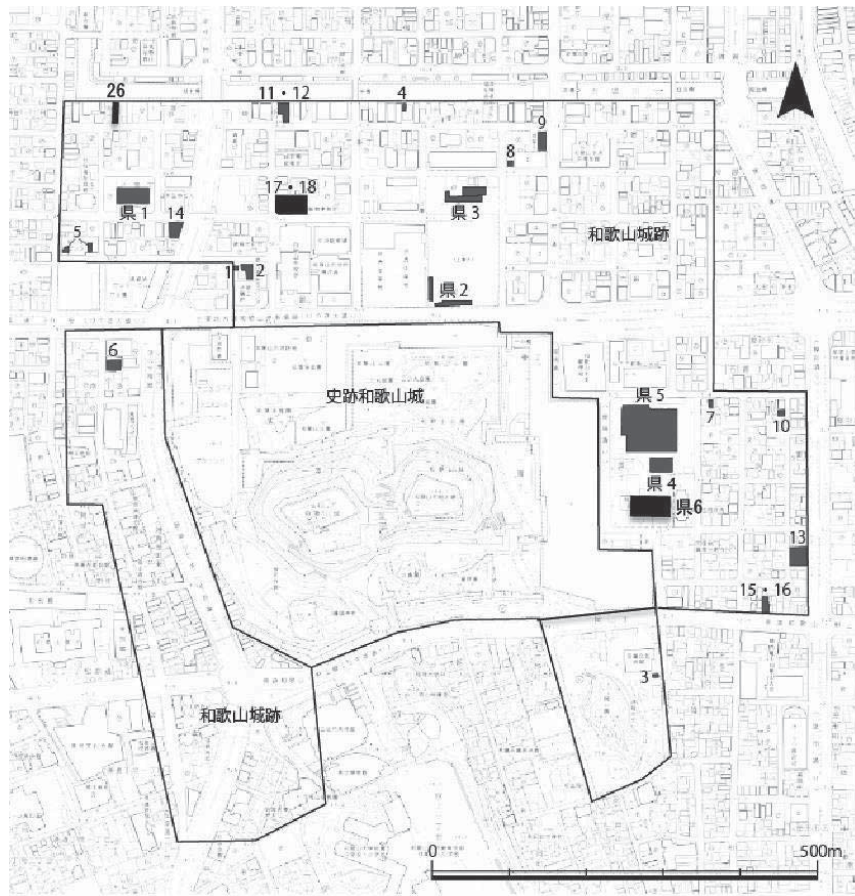


图10 和歌山城跡調査位置図

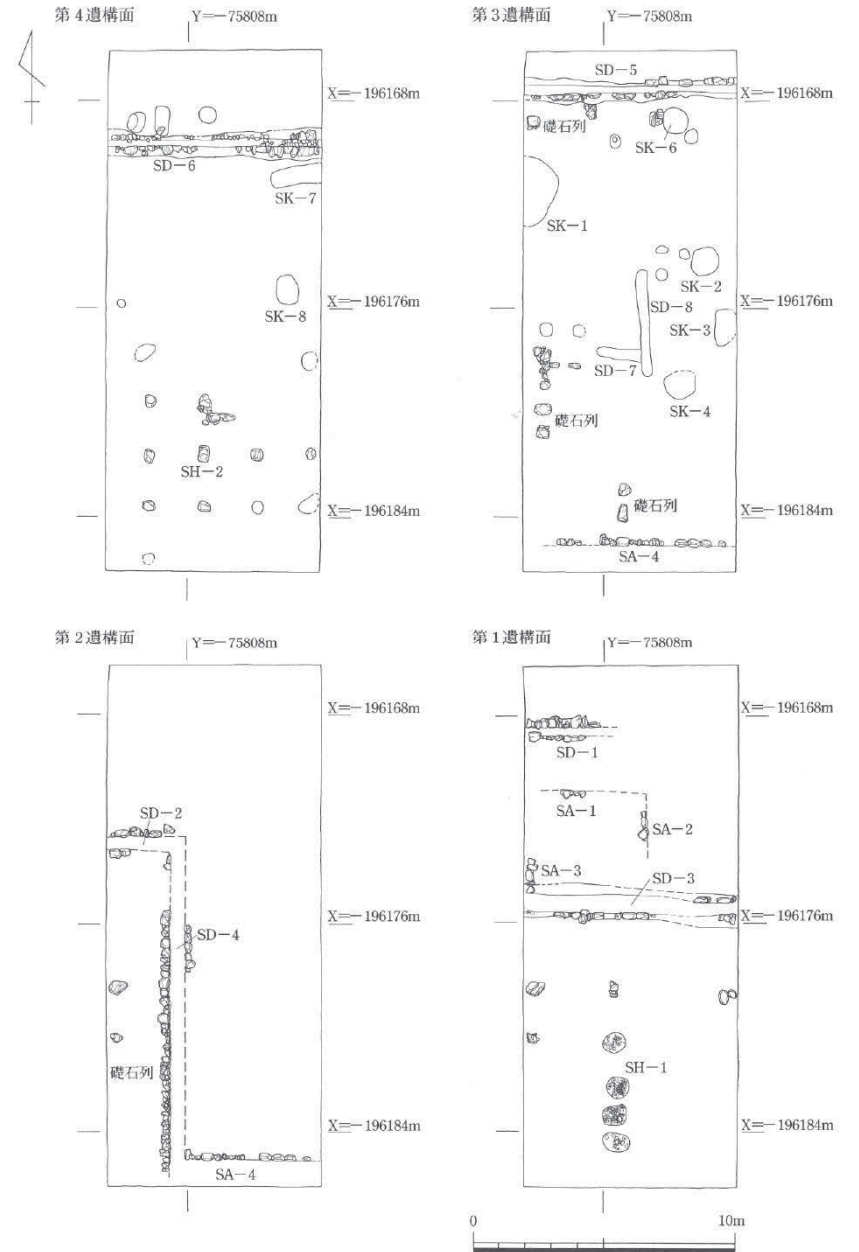


图11 和歌山城跡第9次調査遺構変遷図

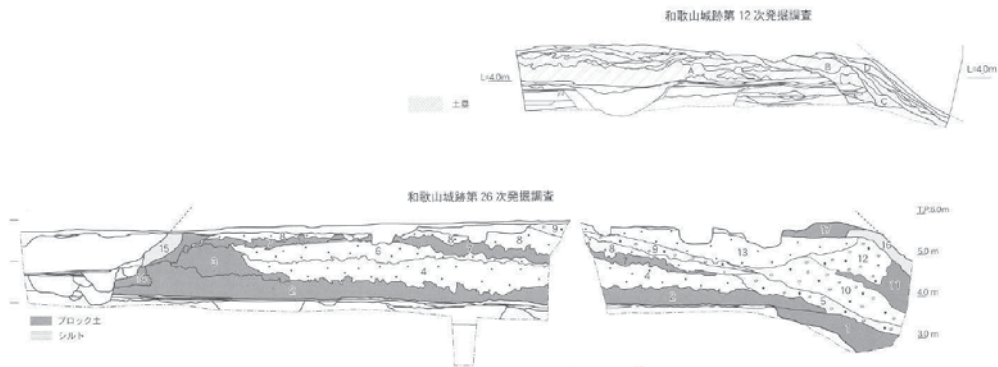


図12 和歌山城跡第12・26次調査土層断面図



図14 鷺ノ森跡調査区位置図

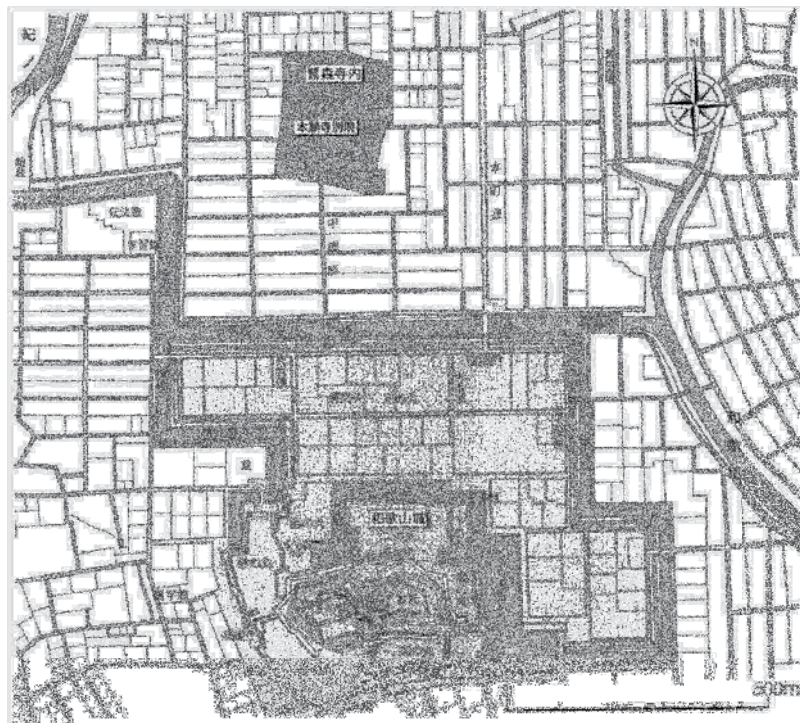


図13 和歌山城跡と鷺ノ森跡の位置関係図

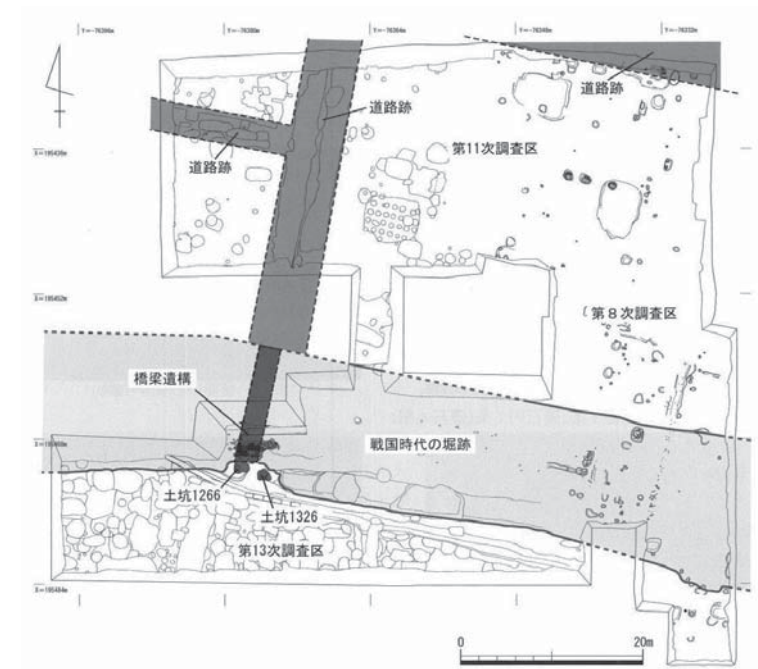


図15 鷺ノ森跡雑賀惣国期の遺構

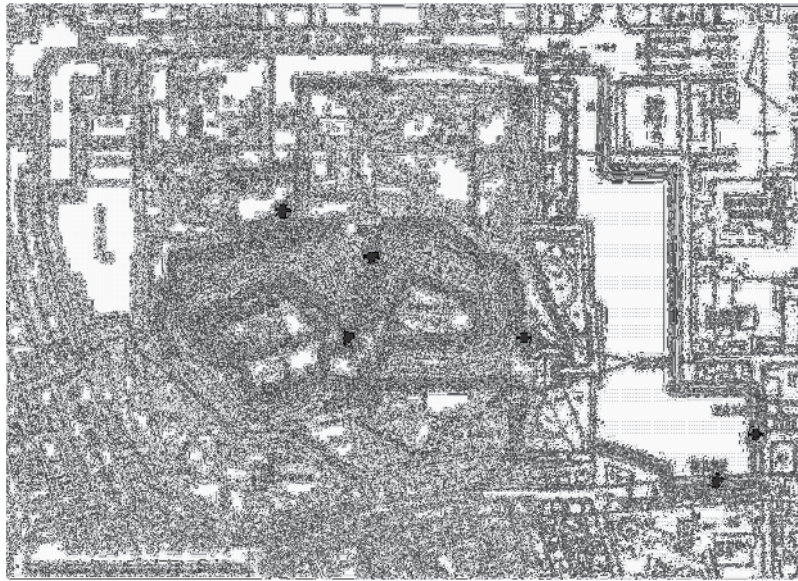


図16 第1期石垣（緑泥片岩）の分布と調査位置

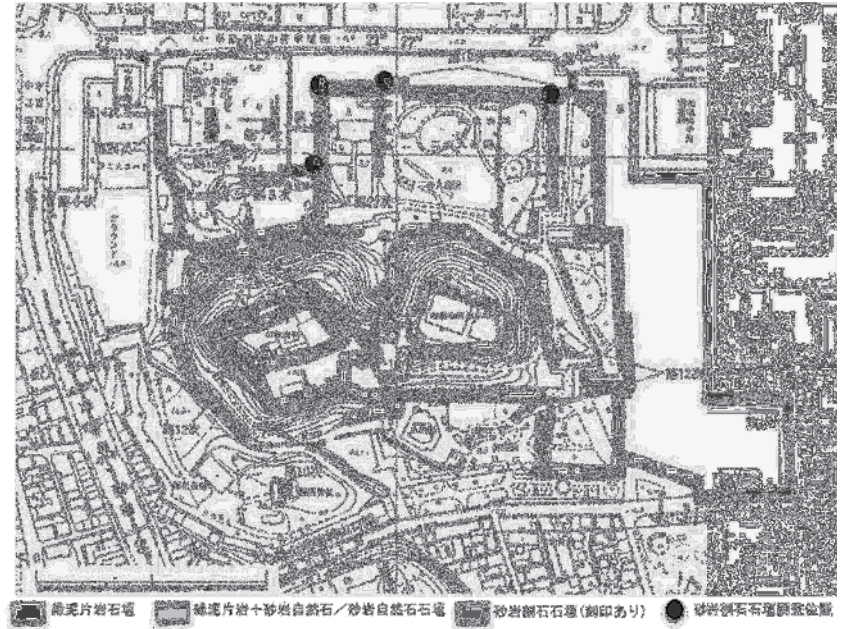


図18 第3期石垣（砂岩割石（刻印有））の分布と調査位置

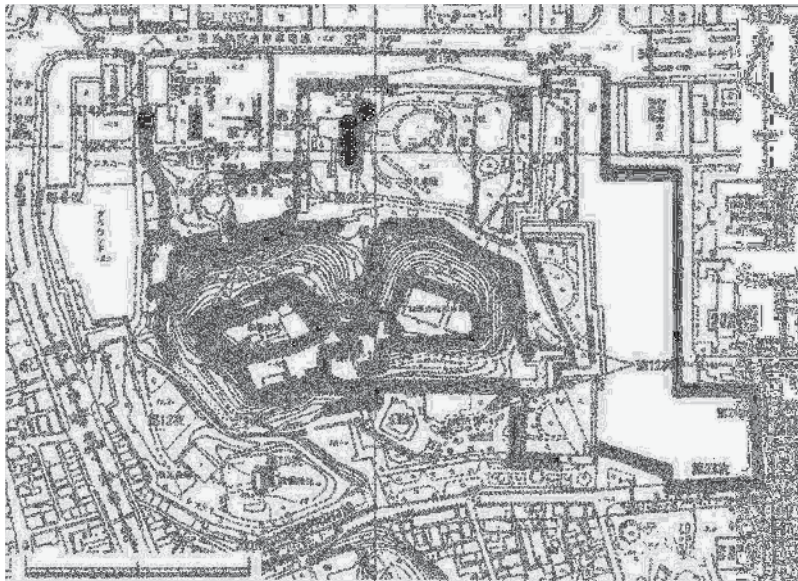


図17 第2期石垣（緑泥片岩・砂岩自然石混合）の分布と調査位置

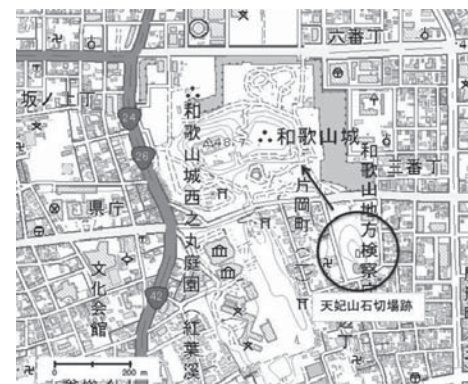


図19 天妃山石切場からの石材搬入路



図20 友ヶ島石切場からの石材搬入路

りかんじょうあと ひらふくごてんやしきあと
利神城跡と平福御殿屋敷跡

公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
垣内 拓郎

1 はじめに

利神城跡および平福御殿屋敷跡は、兵庫県佐用郡佐用町平福に所在する。利神城は利神山（標高約 373m）の山頂に築かれた高石垣を有する山城である。そして、その西麓には西側を流れる佐用川を天然の堀として、平福御殿屋敷と呼ばれる居館跡があり、さらにその南側には城下町が広がっていたとみられる。いずれも 17 世紀初頭に成立する。

平成 29 年 6 月 16 日に文化審議会は、「利神城跡」について国史跡に指定するよう文部科学大臣に答申した。「利神城跡」として答申された指定範囲は、山城部分と山麓の御殿屋敷および城下町の一部にあたる。また、この答申にあたって利神城跡等の調査研究が進められ、『利神城跡等調査報告』（佐用町教委他 2017、以下『報告』）が刊行されている。今回、これに併せて利神城跡と平福御殿屋敷跡について、『報告』及び既往の発掘調査成果等を踏まえて紹介したい。また、関連遺構として利神城の南麓に所在する戦国期の居館跡である別所構についても触れることとする。

2 利神城と平福御殿屋敷の略史

(1) 戦国期の利神城【戦国期・宇喜多期】

- ・ 戦国期の佐用では、在地の赤松氏、中国地方からの尼子氏や毛利氏、宇喜多氏、東からの織田氏が戦いを繰り返す。
- ・ 戦国期の山城（城主：赤松家家臣別所氏、〈羽柴氏？〉、宇喜多氏）
- ・ 「別所構」：利神城の南麓に位置し、旧因幡街道に面し、土塁跡が残る。

(2) 利神城と平福御殿屋敷、城下町の成立と廃絶【池田期】

- ・ 慶長 5 年(1600)の関ヶ原の戦いの後に播磨 52 万石を領した池田輝政が姫路城を本城として設置した 6 支城の一つ。(※他の支城は、三木・船上・高砂・龍野・赤穂)
- ・ 池田由之（輝政の甥）が慶長 6 年(1601)入城。山城を総石垣にするなど大規模改修。別称「雲突城」。平福御殿屋敷、城下町も同時に築造。
- ・ 由之、慶長 14 年(1609)に備前下津井城に移り、その後城主が次々と変わる。《甥・長明(1607)、子・忠継(妻・良正院)(1613)、子・輝興(元和元年(1615))→平福藩成立》
- ・ 慶長 10 年(1610)田住村の中に屋敷地の並ぶ「平福本町」の町場形成か。
- ・ 元和元年(1615)頃には利神城の山城としての機能停止か？
- ・ 寛永 8 年(1631)輝興、赤穂城へ移る。利神城廃城。平福藩廃絶。→山崎藩主輝澄(子・輝興の兄)領に。「夫ヨリ平福破城シ屋敷跡等悉ク畠ニ成」(『播磨鑑』)
- ・ 寛永 10 年(1633)には佐用川左岸の御殿屋敷、武家屋敷群等廃絶。翌、寛永 11 年には耕作地化している。
- ・ 寛永 15 年(1638)の検地帳には、佐用川右岸の屋敷地を、上町・中町・下町・鉄砲町・浦町に区分して記載し、下町にこうじや・わたや・ふきや等の職業の屋号が見える。

(3) 宿場町「平福」の成立【宿場町期】

- ・ 寛永 17 年(1640)、松平(松井)康英が山崎藩主となり、佐用郡のうち平福・長谷・佐

用を旗本領として分知。平福は甥の康朗領となって陣屋が置かれ、田住氏が代官となる。

- ・ 寛永 19 年(1642)、鳥取藩が参勤交代を開始。田住家が鳥取池田家から平福宿の本陣に指定される。
- ・ 以後、佐用川左岸に所在する旧城下町は宿場町へ転換し、近世因幡街道の宿場町「平福」として発展。

3 利神城と平福御殿屋敷の調査成果について

利神城とその関連遺構について、①山城地区、②御殿屋敷地区、③城下町、④別所構の項目別に山上雅弘氏の研究成果(山上 2017)を基にみていく。なお、発掘調査は、②～④について実施されている。なお、名称等は廃絶後の姿が描かれた『利神城古図』(18 世紀後半頃成立)が参考となる。

【発掘調査歴一覧】

調査主体	②御殿屋敷地区	③城下町	④別所構
兵庫県	平成 24 年度 佐用護岸の南北延長 530m×幅 3～13m で実施。		平成 11 年度
	北側延長 230m	南側延長 300m	
佐用町(郡)	平成元年度(試掘) 城主常屋敷部分	なし	平成 4 年度

(1) 山城地区

- ・ 標高 373m の山頂を中心に、南北 350m、東西 200m の範囲に曲輪が配置される。
- ・ 土造りの部分(戦国期・宇喜多期)と総石垣部分(宇喜多期・池田期)がある。
- ・ 土造り部分：(戦国期ないし宇喜多期の遺構)鴉丸の曲輪および北側堀切、馬場周辺曲輪や南側の 2 重堀切、大阪丸等の城郭周辺部
- ・ 総石垣部分：(宇喜多期末期)天守丸石垣、馬場石垣等、(池田期)本丸・二の丸・三の丸の中心曲輪群の大半。
- ・ 池田期に構築された範囲は、戦国時代、宇喜多期の城域の中心部分に限定され、周辺には古い段階の遺構がそのまま残される 2 重構造。戦国期―宇喜多期―池田期の時代的変遷を示す。
- ・ 最大高 8～10m を測る高石垣が構築され、中心曲輪群は総石垣構造。
- ・ 山城の石垣は直線的な塁線や小規模な内枳形の虎口等、急峻で狭隘な地形的な制約の中で対応した築城技術の柔軟性に特徴があり、兵庫県内では類を見ない。
- ・ 中心となる縄張り構造は、天守丸・本丸・二の丸の三段構成で横移動が容易な構造となっている。
- ・ 天守丸や二の丸の北西張り出し部や北西に伸びる尾根の大阪丸が直線的に並ぶ構造をもち、これらには櫓が存在した可能性がある。櫓の配置には北西方向の因幡街道に対する視覚的効果を意識したとみられる。
- ・ 遺物としては多数の瓦が散布しており、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、鯉瓦等が採集されている。中心曲輪群や三の丸に主に散布するが、鴉丸周辺や大阪丸等周辺の曲輪にも散布しており、また天守丸や二の丸の石垣裏込めに瓦が包含されていることが指摘されている。今後、建物と石垣の構築時期を検討するうえで、詳細な瓦の分析が

必要となってくる。

(2) 御殿屋敷地区

- 御殿屋敷は利神城の山麓居館で、南北 370m、東西 110mの規模を持つ。
- 南北を石塁で仕切り、南側は全面に堀を持つ。西側は、佐用川・庵川を堀として護岸に石垣を築いて曲輪内を囲んで防衛したとみられる。現在も地上に北側石塁と南側石塁の一部が良好に残る。
- 『古図』によれば、居館には北寄り山裾に平面長方形の「城主常屋敷」があり、周囲より一段高くなっている。また、その北側には「御台所」「御花畑」が並んでいた。平成元年に佐用郡教委が試掘調査を実施し、石列を検出しているがどの部分に比定されるか現状では不明。
- 城主常屋敷の南前面には大手となる大きな枡形虎口があり、前面の石垣が良好に残される。虎口は突出した外枡形構造で、石塁によって三方を囲む。
- 大手枡形虎口は山城への登城口へも続き、登城道も良好に残る。登城道は山城から連なる直線的な2本の尾根によって囲まれる構造で、倭城の登り石垣と同様の構造を持つことが指摘されている。
- 平成24年度の発掘調査では、南石塁西端の場内外両面(石垣1・2)と佐用川を仕切る石垣(石垣3)が検出された。場内側の石垣1の検出された高さは2.8mであるが、東側に残る石塁から復原すると堀底から約6mの高さがあった可能性がある。
- 石垣は、打ち込みハギ、布積み崩し、石材には規格性が乏しい。慶長初期の築城に際して築かれたもの。
- 発掘調査では枡形虎口付近で屋敷と関連する建物や石組みの暗渠、廃棄土坑などが検出された。廃棄土坑には瓦が投棄され、間隔をおいて点在する形で見つかったことから、屋敷背後の裏庭の景観が推測される。
- 出土遺物は、陶磁器が17世紀前半頃のもの为主体を占め、唐津焼や備前焼、初期伊万里焼等がある。廃棄土坑からのものが多く、退去時に集中して廃棄されたものと考えられる。
- 出土瓦は、利神城の同範例が複数型式出土しており、山城地区と同時に御殿屋敷地区の築造が進められた可能性が高い。
- 御殿屋敷といいながら、本格的な城郭構造を有した遺構といえる。

(3) 城下町

- 『古図』では島と記載されるが、平成24年度の発掘調査の結果、掘立柱建物、礎石建物、土坑、溝など城下町に関連する遺構を検出した。
- 建物は場所によって稠密に検出された地点もあることから、建て替えが行われるなど、一定期間の存続が推定される。
- 出土遺物としては、土師器、備前焼、唐津焼等が一定量出土している。出土瓦には、御殿屋敷地区や利神城では出土しない型式の軒瓦が多数出土しており、城下町と御殿屋敷への瓦の生産供給の間に時間差あるいは意図的な地域差が推測される。
- 調査区南端の礎石建物(SB163)は、南側に隣接した場所から瓦が多く出土しており、瓦葺き建物が想定される。また建物周辺では志野焼や特注の備前焼花生が出土している。
- 城下町南端には、高い生活レベルの居住者(有力町人か)の存在が想定される。
- なお、『古図』や文献からは、城下町は佐用川右岸域にも広がり、佐用川に架かる京

橋を中心に因幡街道に沿って町場が形成されていることが推測される。

(4) 別所構

- 利神城の南麓、平福から南に1kmの口長谷に所在する。
- 居館の東側には旧因幡街道が南北に通り、西側には蛇行する佐用川に面する。
- 館跡の規模は南北95m、東西75mで平面は北側が狭くなる三角形を呈する。
- 近年までは南辺に土塁が残り、その規模は基底部8m、高さ1.5m、長さ80m以上。
- 平成4年度の佐用郡教委の発掘調査等によって、これに伴う幅約6mの堀が確認されている。
- 土塁内側からは掘立柱建物5棟や石組み井戸、瓦廃棄土坑などが検出されている。掘立柱建物は大型のもので6間×3間(桁行12m×梁行6m)のものがある。
- 瓦廃棄土坑からは、利神城、御殿屋敷と同範と見られる軒瓦が出土し、また揚羽蝶を表した鬼瓦片1点が出土している。
- 土坑の中には窯壁片混じりのものもあり、付近で瓦の焼成を行った可能性が指摘される。

4 利神城と平福御殿屋敷の評価

- 近世初期(慶長期)の高石垣を有する山城として稀少で、山麓の御殿屋敷、城下町、対岸の宿場町(旧城下町)がセットで残る稀有な例であり、包括的に城郭を知るうえで重要。
- 現存する石垣の大半は池田氏による改修とみられるが、宇喜田期の石垣も一部に残る。利神城の石垣は、池田氏の改修後に手が加わっていないことから、慶長期に築造された真正性の高い石垣として貴重。
- 慶長5年(1600)以降の池田氏の播磨国支配を経て行われた利神城の大改修は、関ヶ原の戦い以後未だ不安定な情勢のなかで、姫路城の支城整備の一つとして行われる。山城築造と一体として山麓の居館に登城道へと続く大手枡形虎口を設置することや、石塁や水堀、佐用川・庵川の天然の堀で防御性を高める等、山麓の居館も含めた城郭化を図った特異的な例。
- いわゆる慶長期の築城ブームの中、池田氏領内の支城のなかでも利神城跡は大規模に改修を受けた支城であり、現在までも良好に残る遺構から、その詳細について最も知ることができる稀少な城跡である。

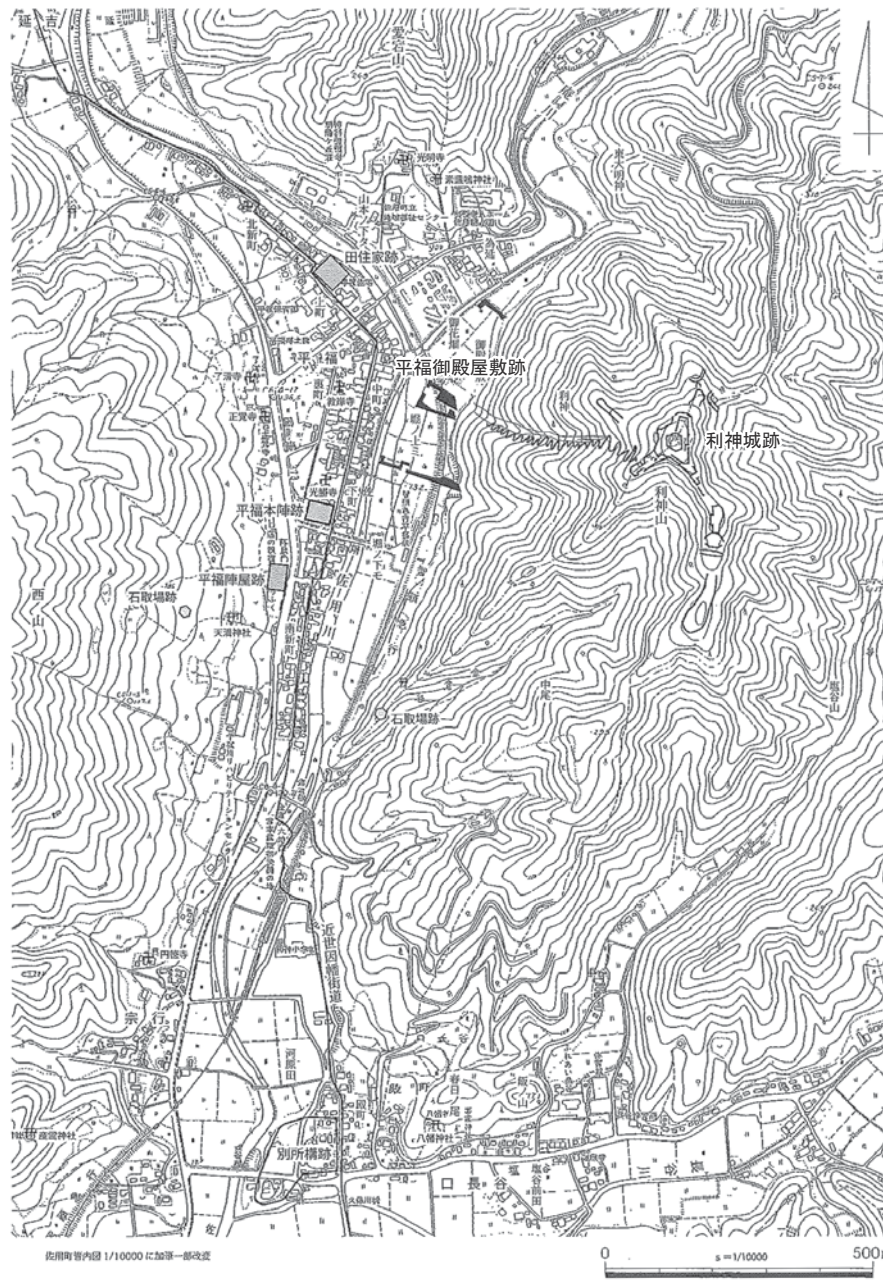
5 おわりに—利神城跡が国史跡へ—

現代にまで残る宿場町「平福」の歴史的景観は、中世から近世初期にかけての利神城や平福御殿屋敷、そして城下町が成立し、変遷していく一連の歴史的な脈絡の中に位置づけられる。そして、これまでに兵庫県歴史的景観形成地区や兵庫県重点文化財活用地区に指定されてきた。そして、今回の利神城跡の国指定史跡への答申も、平福のまちの景観にとって歴史的な特異点となると思われる。つまり、地域の人たちがその地域の価値や魅力、誇りを再認識したうえで、平福のまちの発展に取り組むきっかけになるということである。

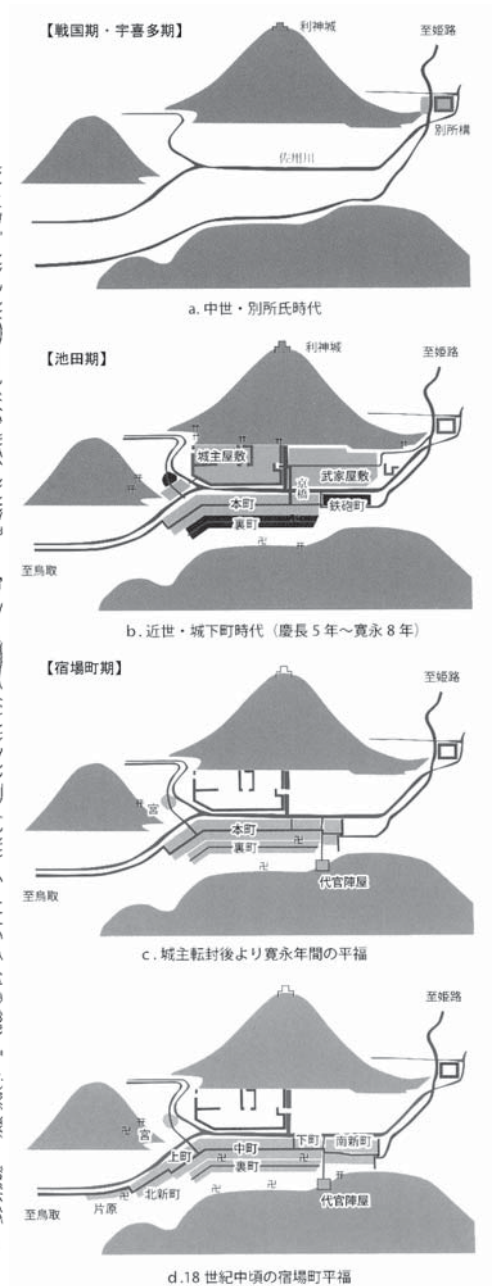
現在、佐用町教育委員会では、利神城跡の石垣遺構の中に崩落している箇所や、崩落しそうな危険な箇所があることから、登城を差し控えるよう注意喚起している。今回、国指定史跡として答申されたが、保存と活用の両立に向けて課題は多い。地域と行政が一体となって、着実に課題を乗り越えていくことが期待される。



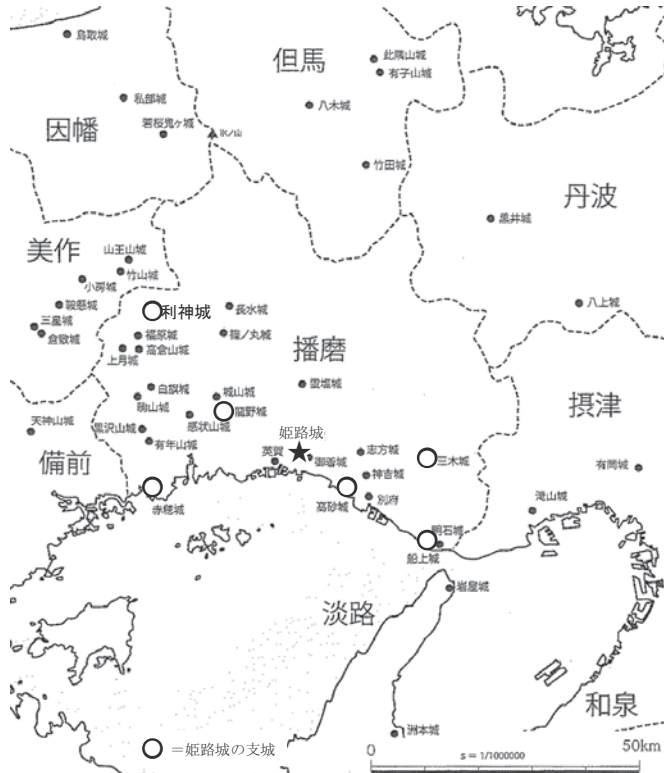
第1図 兵庫県と佐用町と遺跡の位置（佐用町教委他 2017 に加筆）



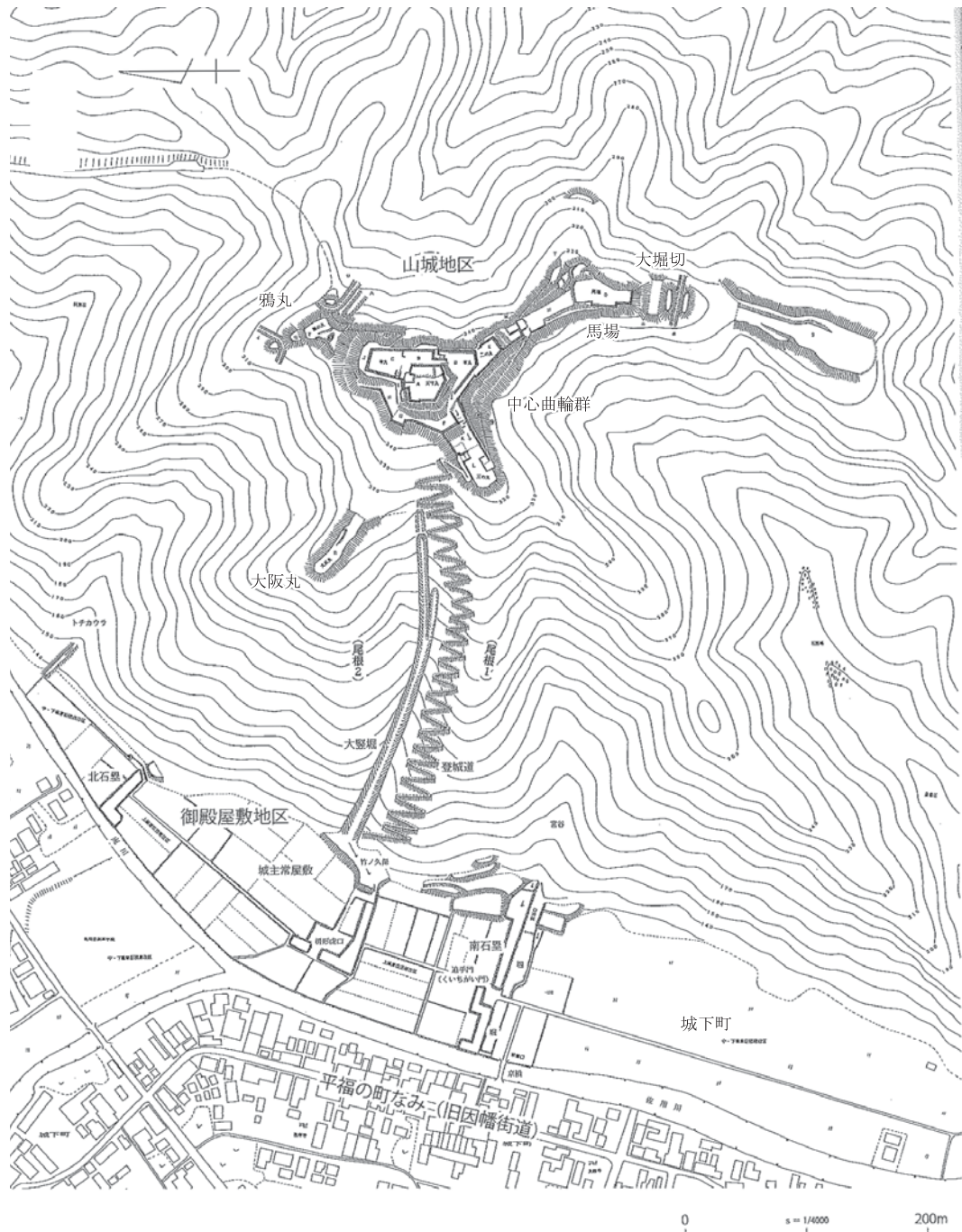
第2図 利神城と関連遺跡等の位置（佐用町教委他 2017 に一部加筆）



第4図 平福変遷模式図（佐用町 2013 に一部加筆）

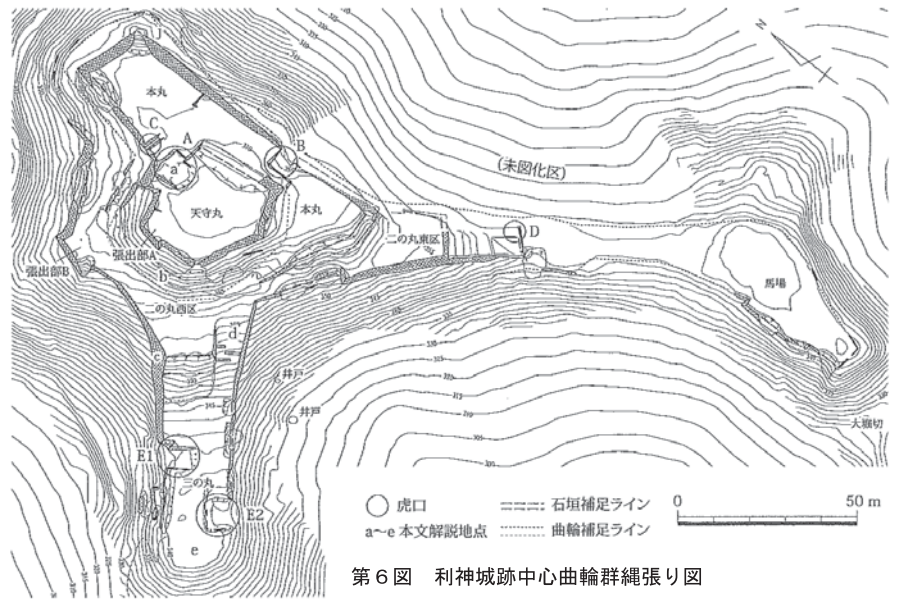


第3図 池田領初期の播磨国における姫路城と支城の位置関係図（佐用町教委他 2017 を一部改変）

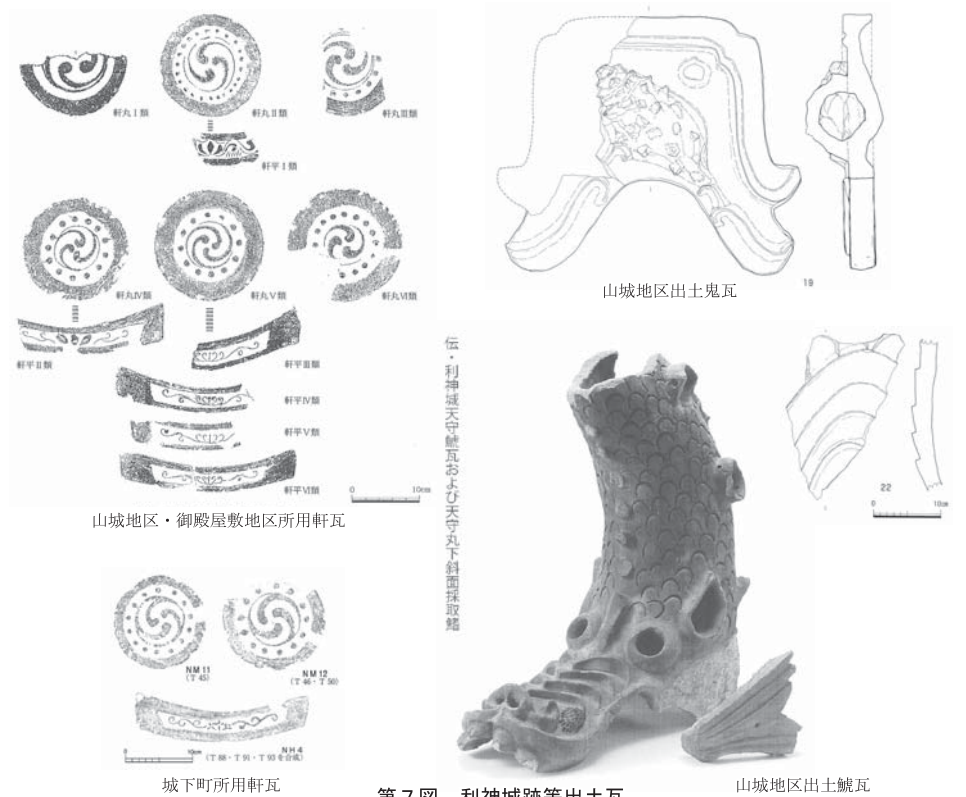


第5図 利神城跡全体縄張り図 (佐用町教委他 2017 に一部加筆)

西尾孝昌 1993『播磨利神城』を引用、一部改変加筆

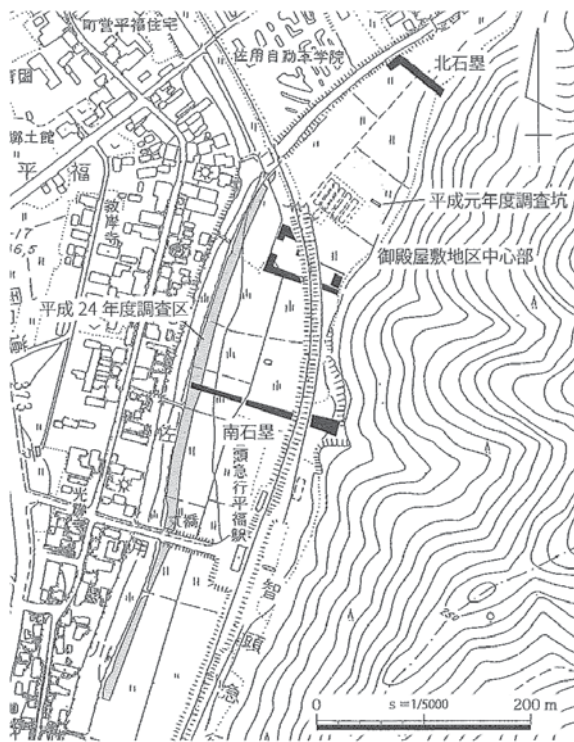


第6図 利神城跡中心曲輪群縄張り図
(佐用町教委他 2017 に一部加筆)



第7図 利神城跡等出土瓦

(乗岡 2001、佐用町 2013、兵庫県教委 2014、佐用町教委他 2017)



①御殿屋敷地区・城下町発掘調査区位置



⑦3区d区画平面図(部分)



⑧3区出土備前焼花生 (S=1/8)

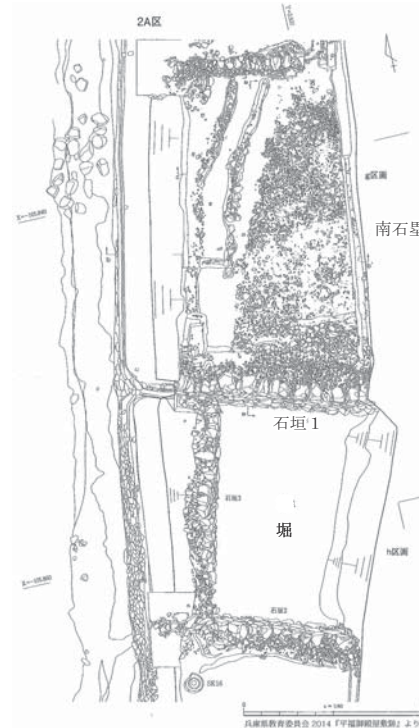


③平成24年度調査区

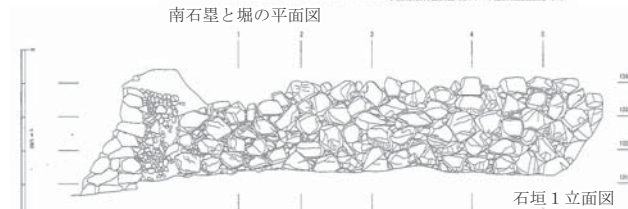
第8図 御殿屋敷地区・城下町発掘調査成果〈抜粋〉(兵庫県教委2014、佐用町教委他2017)



②平成元年度調査区平面図



南石塁と堀の平面図



石垣1立面図

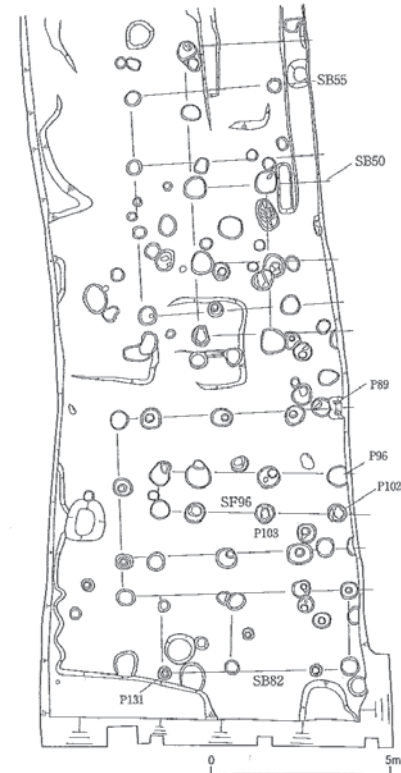
④2A区g・h区画(堀・南石塁部)平面図・立面図(部分)



⑤堀出土遺物(S=1/8)

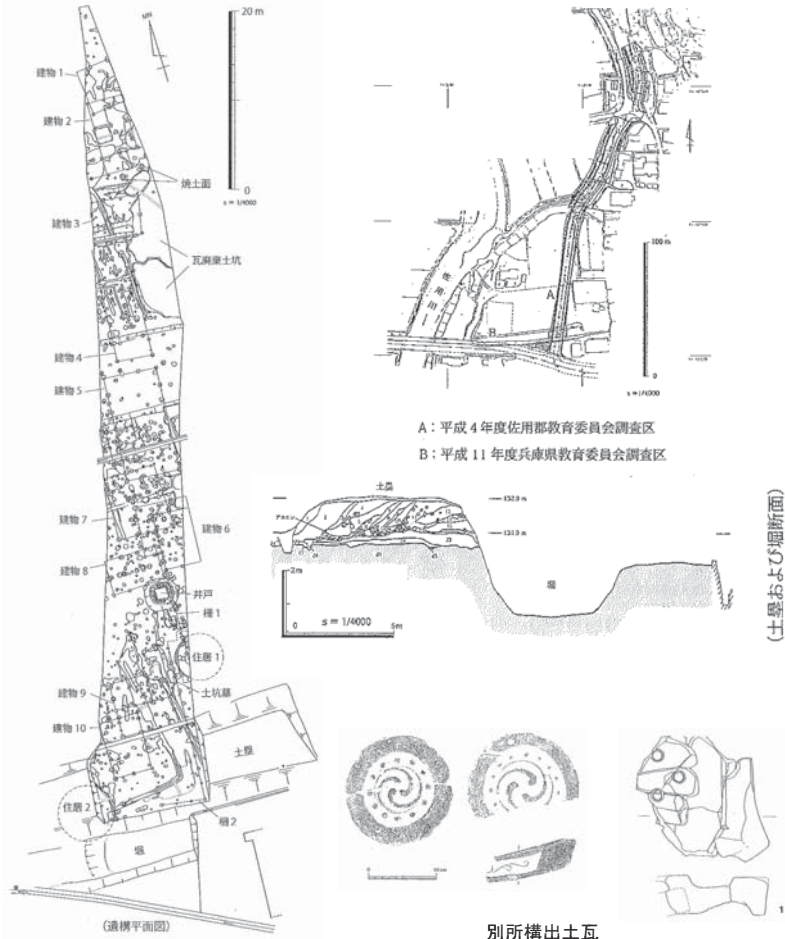


④2A区a区画平面図(部分)



⑥2B区d区画平面図(部分)

表1 利神城跡・平福御殿屋敷跡関連年表
(佐用町教委他 2017 を基に作成)



第9図 別所構発掘調査成果抜粋 (藤本 1993、佐用町教委他 2017)

《引用・参考文献》

- 西川幸治他 1984 『利神城と平福の町なみ』観光資源保護財団
- 佐用町 1986 『伝統的建造物保存対策調査報告書 平福』
- 城郭談話会 1993 『播磨利神城』
- 藤本透 1993 「別所構の考古学的研究」『播磨利神城』城郭談話会
- 栗岡 実 2001 「利神城の瓦」『ひょうご考古』第8号 兵庫考古研究会
- 佐用町教育委員会 2013 『利神城と平福のまちなみ』
- 兵庫県教育委員会 2014 『平福御殿屋敷跡』
- 佐用町教育委員会他 2017 『利神城跡等調査報告書』佐用町利神城跡等調査委員会・佐用町教育委員会編
- 山上雅弘 2017 「第3章 遺構から見た城郭のすがた 利神城の遺構と概要」『利神城跡等調査報告書佐用町利神城跡等調査委員会・佐用町教育委員会編

西暦	元号	利神城・平福の主な出来事	周辺の名な出来事	領藩・城主等
1331 ～1333	元弘年間	内海修理亮が居城する。(『赤松家播備作城記』)		
1349	貞和5年	別所教範が豊福荘から田住荘に移り、利神城に拠る。(『佐用郡誌』)		
1392	正中9年		南北朝の合一	
1441	嘉吉元年	この頃、別所藏人光則が利神城に居城。(『佐用郡誌』)	嘉吉の乱	
1467	応仁元年	別所日向守一治が利神城に居城。(『佐用郡誌』)	応仁の乱	
1566	永禄9年	龍野城主赤松政秀が溝浅七郎兵衛尉・嶋津源兵衛尉らの率いる軍勢を佐用郡へ進出させ、利神城の麓(『利神表』・『りかんの城山下』)で尾子方に与同する国内勢力と交戦。(『赤松政秀感状』・『湯浅右馬允奉公書』・『総合報告』) ※別所構が同時期に存在 (『報告』)		別所
1573	天正元年		室町幕府が滅ぶ。	
1577	天正5年	利神城主別所中務が羽柴秀吉に降伏し、人質を差し出して来る2月までの在城を許される。(『下村文書』)	織田氏が播磨に入る。福原城(佐用)、上月城(上月)が落城する。	
1578	天正6年	山中鹿之助幸盛が利神城に侵攻し、別所定道・林治らと戦う。(『佐用郡誌』)	毛利氏が播磨に入る。上月合戦。上月城、落城。	
1579	天正7年	※上月合戦後～9月まで利神城は毛利方、織田方不明。	9月宇喜多直家が織田氏に降る。	
1580	天正8年	穴栗郡長水城主宇野祐清(毛利方)配下の横野助兵衛尉が居城するが、羽柴秀吉による広瀬攻め(宇野祐清掃討戦)に伴って、利神城も落城。(『赤松家播備作城記』) 羽柴秀吉が穴栗郡長瀬水城を攻落した時、別所日向守が利神城を退去する。後年、宇喜多秀家が拝領した際、家臣の服部勘助が在城。(『播磨鑑』)	織田氏が播磨を平定する。	
1584	天正12年	羽柴秀吉が、蜂須賀家政に岸和田城助勢の戦功への恩賞として「播州佐世郡の内みかつき・りかん」において知行3千石給与された。(『蜂須賀家先祖勲功覚書』『報告』)		羽柴?
1585	天正13年		羽柴秀吉が関白となる。	宇喜多
1593 ～1596	文禄年間	※天正13年～文禄年間(1593～1596)までの間に佐用郡が宇喜多領に組み込まれる。この頃までに、宇喜多秀家によって取り立てられた服部勘助が城番として在城。(『報告』)		
1600	慶長5年	関ヶ原の戦い後、服部勘助が利神城を退去。(『平福利神城由来』・『赤松家播備作城記』・『播磨鑑』他) 池田輝政が播磨52万石を領する。播磨国内において、姫路城を本拠に、三木城船上山(明石)・高砂城・龍野城・利神城・赤穂城の6つの支城を置く。	関ヶ原の戦い	
1601	慶長6年	11月3日、池田由之(輝政の甥)が宗家の池田輝政から佐用郡2万2千石を給与され、拠点として「屋敷構」を平福に構築する。(『池田由勝奉公書』) この頃に利神城の改修と平福御殿屋敷の築造を一体の構築物として実施したとみられる。(『報告』)		由之
1603	慶長8年	※この頃に別所構が廃棄されたか。	江戸幕府開かれる。	
1605	慶長10年	池田輝政が利神城天守の破壊を命じたという伝承あり。(『平福利神城由来』・『田住家文書』他)		
1607	慶長12年	備前下津井城より池田長明(片桐池田氏)が播磨国佐用郡平福へ転出。長明が幼年(2歳)のため、池田輝政の命により片桐池田氏重臣岩田貞勝が家政を代行する。(『池田長久奉公書』・『家中先祖覚書』) ※池田由之は慶長12年まで所務。(『田住家文書』)		由之 長明
1609	慶長14年	池田由之が備前国児島郡下津井城主となり、佐用郡を離れる。(『池田由勝奉公書』)		
1610	慶長15年	※『慶長十五年極月田住村検地帳』(田住村のなかに屋敷地の並ぶ「平福本町」の町場がある。佐用川に架かり、武家地と町人地を結ぶ京橋口を中心に町場が充実し、城下町の様相をみせる。(『利神城と平福の町なみ』))		
1611 ～1612	慶長16 ～17年	※『慶長播磨国絵図』(慶長16～17年頃作成)に利神城は「古城」として表記され、平福は町として把握される。		
1613	慶長18年	池田輝政が病没し、遺領の再配分が行われ、池田忠継に備前国、播磨国佐用・赤穂・穴栗郡は継承される。佐用郡平福は備前岡山城主である忠継の支配下(蔵入地)に置かれた。池田長明は、佐用郡平福から播磨国龍野へ移る。(『駿府記』・『寛永諸家系図伝』・『総合報告』) 穴栗郡・赤穂郡・佐用郡十万石が忠継母の良正院(誓姫)に化粧料として与えられる。(『池田福本家譜』) 慶長16～19年まで良正院屋敷となると伝えられる。(『田住家文書』)	池田輝政が病没。	忠継
1615	元和元年	良正院と池田忠継が相次いで死去。池田輝興(5歳)が佐用郡2万5千石を領有する。(『池田利隆書状』・『寛永諸家系図伝』・『校正池田氏系譜 輝興譜』) これをもって平福藩が成立し、利神城はその藩庁の役割を担う。元和3年頃まで後見人である池田利隆・光政が実質的な差配を行う。(『報告』) ※この頃には利神城の山上部分の建物が撤去され、山城としての機能が停止した可能性がある。(『報告』)	大坂夏の陣 一国一城令	輝興
～	～	池田輝興が平福藩主の時に、清水次右衛門が「御城山上番役」を務める。(『清水喜喜曾夫奉公書』) ※御殿屋敷に対する山城部分に勤番所が設置され、番役を配置して管理していた。(『報告』) 池田輝興が3万5千2百石の領主となって赤穂に移る。佐用郡は、山崎藩主池田輝澄(輝興の兄)へ加増分として与えられる。(『校正池田氏系譜 輝興譜』・『池田輝澄判物』他) 「夫ヨリ平福破城シ屋敷跡等悉ク畠ニ成」(『播磨鑑』) ※少なくともこの頃には利神城は既に廃城となっている。		
1633	寛永10年	※『利神城古図』に記載される旧屋敷主名に輝興、輝澄の家臣の名前が見える。この頃に平福御殿屋敷を中心とする武家屋敷群が廃絶した可能性がある。(『報告』)		
1634	寛永11年	※下記の『検地帳』の記載からこの年には、武家屋敷群と御殿屋敷が耕作地化していることが判明。(『報告』)		
1635	寛永12年	※『平福村明屋敷検地帳』(寛永11年から16年にかけて山崎藩が検地。政治の中心が穴栗山崎に移ることをうけて、佐用川左岸の城主常屋敷、家臣屋敷地は解体・撤去され、畠に編入された。(『報告』))		
1638	寛永15年	※『田住村田畑名寄帳』(屋敷地を、上町・中町・下町・鉄砲町・浦町に区分して記載。下町にこうじや・わたや・ふみや等の職業の屋号が見える。)		
1640	寛永17年	松平(松井)康英が山崎藩主となり、平福は甥の康朗領となって、陣屋が置かれる。田住氏が代官を務める。※松平(松井)康英が佐用郡のうち平福・長谷・佐用の3領を旗本領として分知。		
1642	寛永19年	田住家が鳥取池田家から平福宿の本陣に指定され、120石の所役免除と屋敷地の免除を認められている。※田城下町から宿場町への転換。	鳥取藩が参勤交代の開始	
1662 ～1673	寛文年間	田住村から平福村へと改称したと伝える。(『佐用郡誌』)		
1729	享保14年	平福六地藏建立(台石記年) (町指定文化財)		
1738	元文3年	『利神城古図』成立。(田住貞義が利神城の実態を記し、旗本松井康明のもと都筑四郎左衛門による慶安3(1650)年の報告の写しが、絵図と共に記載される。)		
1813	文化10年	平福の町場、280軒(『田住家文書』)		
1836	天保7年	6代康正の時、陸奥棚倉に転封。幕府領となる。	出石藩仙石騒動。	幕府領
1839	天保10年	平福の宿屋12軒		直轄
1863	文久3年	康直、平福領2500石で旧知戻し。陣屋を普請。		旗本領
1867	慶応3年		大政奉還	松平氏
1869	明治2年		版籍奉還	
1871	明治4年		廢藩置縣	